

第26回東京都中学校美術教育研究大会

第8・9・10ブロック北多摩大会

人間力をはぐくむ美術教育
～いま、求められる創造性～

豊かな「かかわり」を生み出す美術の授業



平成21年1月16日（金）

府中市美術館／府中市立浅間中学校



さわってみよう



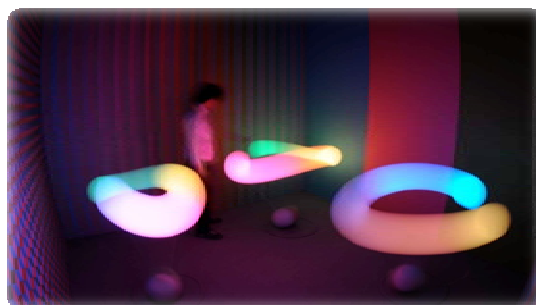
体育館いっぱいに
新聞紙を広げて...





府中市美術館

府中ビエンナーレ出品作家の作品



牛島憲之記念館所蔵作品

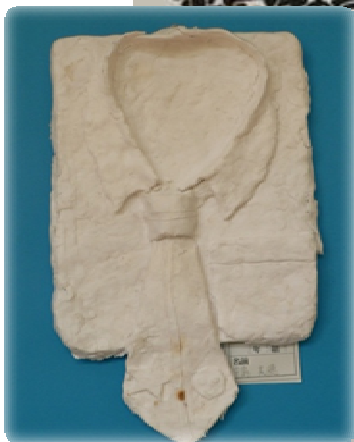


原高史氏の作品



北多摩地区中学校美術展
～ 過年度の展示風景より





大会紀要目次

			ページ
あいさつ	府中市教育委員会教育長	新海 功	1
	東京都中学校美術教育研究会会長	牧井 直文	2
	第26回東京都中学校美術教育研究大会実行委員長	中村 一哉	3
大会要項と内容			4
基調提案	大会研究局長	大澤 晃	6
講演者の紹介	東京藝術大学准教授	布施 英利先生	8
会場案内図(府中市美術館)・(府中市立浅間中学校校舎各階平面図)			9
第4回府中ビエンナーレの紹介			12
美術館と教育普及			14
公開研究授業1「府中市美術館牛島憲之記念館の作品鑑賞(ギャラリートーク)」			16
	府中市立府中第三中学校	遠藤真木子	
	府中市美術館学芸員	武居 利文 成相 肇	
公開研究授業2「府中市美術館企画展(ビエンナーレ作品)の鑑賞」			18
	東大和市立第二中学校	未至磨明弘	
	武蔵野美術大学生		
公開研究授業3「ビエンナーレ作家と共に」	府中市立府中第八中学校	中川 園子	20
	府中ビエンナーレ出品作家	原 高史氏	
公開研究授業4「小学生と中学生が共同で行う授業(新聞紙を使って)」			22
	東久留米市立東中学校	藤井 義法	
	武蔵野市立第三中学校	三浦 悦子	
	武蔵野市立第六中学校	市野 美香	
	府中市立若松小学校	大杉 健	
公開研究授業5 木から小刀でつくる「府中の森の守り像」			24
	西東京市立田無第四中学校	木原 美恵	
公開研究授業6「自分を取りまく世界(事象と自分の距離)」			26
	国分寺市立第五中学校	北澤 昭俊	
誌上発表	武蔵村山市立第二中学校	棟方 篤子	28
誌上発表	狛江市立狛江第一中学校	石黒しおり	30
誌上発表	小金井市立小金井第一中学校	澁谷寿美恵	31
誌上発表	国立市立国立第三中学校	宇野 庄治	32
誌上発表	小平市立小平第四中学校	杉山 充	33
誌上発表	清瀬市立清瀬第五中学校	別府 世通	34
誌上発表	東久留米市立久留米中学校	廣瀬 正徳	36
誌上発表	立川市立立川第五中学校	中村 三里	38
誌上発表	三鷹市立第二中学校	大倉 知恵	39
誌上発表	調布市立神代中学校	加藤 祐志	40
誌上発表	昭島市立清泉中学校	梶原 拓生	41
誌上発表	東村山市立東村山第二中学校	川瀬 悦子	42
あとがき	大会副実行委員長	大野 雅生	43
大会運営組織一覧			44
都中美大会開催地一覧			46

あいさつ



府中市教育委員会

教育長 新海 功

第26回東京都中学校美術教育研究大会北多摩大会の開催、誠にありがとうございます。本大会が府中市で開催されることを心より歓迎します。

府中市は、歴史と文化に富んだ街です。平成2年に市の北西部から、国内でも3例しかない上円下方墳である「武蔵府中熊野神社古墳」が発見されるなど、ロマンに満ちた所です。また、大化の改新により武蔵国の国府が置かれ、古くから政治・経済・文化の中心地として栄えてきました。

文化的には、「灯台のある島」などの作品で有名な洋画家の牛島憲之、詩集『亡羊記』や「ぶんぶんぶん」「巢立ちの歌」の作詞で知られる現代詩人の村野四郎や、旅を通して民俗学を研究した宮本常一など、府中市出身やゆかりの文化人も多く、芸術や文化を愛する意識が市民にも深く根付いています。

市ではさらに、市民の主体的な文化的活動を促進し、府中市美術館、府中の森芸術劇場、生涯学習センター、中央図書館などの施設を活用しながら、文化の高い街づくりを目指しています。

今年度、東京都中学校美術教育研究会では、大会テーマを「人間力をはぐくむ美術教育～いま、求められる創造性～」と題し、豊かな「かかわり」を生み出す美術の授業をサブテーマとして、研究に取り組んでこられました。

今回の研究の特徴の一つは、「かかわり」をキーワードにして研究を深めている点です。「かかわり」を「人とのかかわり」「モノとのかかわり」「環境とのかかわり」の三つの柱としてとらえ、それぞれの「かかわり」を相互に関連させることにより、生徒の創造性を引き出す授業改善を実践してきました。このような取り組みは、生徒自身の創造的な活動につながるものと考えています。

特徴の二つめは、美術館、作家、小学校との協同・連携です。府中市には「生活と美術＝美と結びついた暮らしを見直す美術館」をテーマとした美術館があり、従来から学校教育と連携しながら、子どもたちに美術の魅力にふれる多様な機会を提供して、教育活動を支援しています。今回の大会では、作家の協力を得ながら授業展開するなど、新たな試みも実践されます。また、若松小学校の児童との合同の授業を実践するなど、小・中学校の連携についても視野に入れたものになります。

これからの学校教育では、新学習指導要領に示されているように、個性豊かな文化の創造を図っていくことが重要な柱の一つとなります。そのためには「かかわり合う力」が大切であり、互いに尊重し合う態度の育成も相乗的に向上させる必要があります。本大会の提案に基づく実践を通して、美術科の目標である「豊かな情操」の育成を推進する研究が一層深まり、先進的で本源的な価値ある研究として、今後の美術教育の充実へと発展することを願っております。

最後になりましたが、これまでご指導いただきました東京芸術大学准教授布施英利先生、文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官村上尚徳先生をはじめ、研究大会にご参会の皆様並びに、開催のためにご尽力くださいました多くの方々に、敬意を表すとともに感謝申し上げます。東京都中学校美術教育研究会のますますの充実と発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

あいさつ

東京都中学校美術教育研究会

会長 牧井直文



このたび第26回東京都中学校美術教育研究大会北多摩大会が、多数の先生方の参加を得て、ここ府中市で開催されますことを、大変に喜ばしく、また、意義深いことと感じております。大会開催にあたり、ご指導、ご支援をくださいました東京都教育委員会、府中市教育委員会をはじめ、北多摩17市の教育委員会、各市中学校長会、関係機関の皆様には厚く御礼を申し上げます。また、大会の準備にご尽力をいただきました北多摩地区の先生方、会場をご提供くださいました府中市美術館・府中市立浅間中学校の皆様、誠に有り難うございました。

さて、昨年3月、改正教育基本法を踏まえた新たな学習指導要領が告示され、6月には、その移行措置が示されました。今、各中学校は、平成24年度からの新指導要領全面实施に向け、改訂の趣旨・内容への理解を深め、移行に向けた検討を進めている時期にあります。こうした時こそ、今日の時代状況や社会状況をしっかりと見据えて、未来を切り拓く教育をどう実現していくかを思考し、日常の実践のひとつひとつを見直していくことが大切です。今大会のテーマ『「人間力をはぐくむ美術教育」-いま求められる創造性-』は、まさにこうした視点に立って、これから進めるべき教科教育としての美術の在り方を考えようとするものです。

近年、高度情報化やグローバル化の急速な進展によって産業構造が大きく変化し、人々の生き方や意識・価値観さえも変容しつつあります。また、環境問題の悪化、格差社会の拡大、家庭・地域社会の機能低下といった様々な問題を同時に抱えるようになり、先行きの不透明感が一層増しています。このような時代にあって、未来を拓く人間力(生きる力)の育成を、美術教育の立場から考察し、日常の授業改善に繋げていこうとする今大会の視点は、今日の教育改革の中心的課題に対応したものであります。また、中学生の年代は、内面と外的な事象との「かかわり」の中で自我を確立させていく時期であり、人・もの・環境との「かかわり」に焦点をあて研究を進めようとする取り組みは、美術教育のみならず中学校教育全体を考えるうえでも大切な視点といえます。

北多摩地区110校の美術の先生方が、日頃の実践に基づき、美術教育の在り方・方向性を見いだそうと進めてきた研究がこの大会で示されます。都内各地区からお集まりいただきました皆様には、ぜひ熱心に協議を進めていただき、実り多い成果を上げていただくと共に、その成果を持ち帰り、自校の実践に生かしていただければと考えます。

大会開催地である府中市は、自然に恵まれた歴史のある地域です。また、美術館等の諸施設も整っていることから、「美術文化への理解」や「豊かな情操」といった教科目標の視点から考えても最適な環境条件を備えています。美術館と連携した鑑賞教育の実践研究や北多摩地区の生徒作品展も同時に計画されており密度の濃い大会になっています。

府中市でのこの大会が、東京における美術の先生方のネットワークを更に広げる契機になることを期待し、有意義且つ成功裏に進みますことを心より祈念して、私のあいさつとさせていただきます。

あいさつ



第26回東京都中学校美術教育研究大会
大会実行委員長 中村 一哉

この度、北多摩17市が一体となり、府中市を会場として第26回東京都中学校美術教育研究大会が開催されるはこびとなりました。新しい学習指導要領の告示を受けた初めての大会である本大会が、府中市美術館の協力を得て開催できますことに大きな喜びを感じますと同時に、今後の美術教育の方向性を提示する機会とすべく、あらためてその重責を実感しているところであります。

今回、告示された新しい学習指導要領には、小・中学校の義務教育9年間を通してはぐくむ資質や能力を整理した上で、習得、活用、探究の学習過程を通して、児童・生徒に豊かな思考力や判断力、表現力等を養い、課題解決に果敢に取組み、次代を切り拓いていくことができる創造的な人間を育成する方向性が色濃く示されています。その中で、美術教育にもまた総合的に働く力としての「真の学力」をはぐくむ一側面を担う重要な役割が期待されています。

このような認識に基づき、私たちは、「人間力をはぐくむ美術教育～いま、求められる創造性～」を大会テーマとし、その実現のために不可欠である生徒の美術活動の豊かさを生み出す授業の視点を「かかわり」という点からとらえて、サブテーマを「豊かなかかわりを生み出す美術の授業」として、今後の美術教育の在り方を模索し、挑戦する一投としてこの大会を企画してきました。

今回の大会のコンセプトをひと言で言うと、主に次の二点にまとめられます。

第一に、今回の大会は研究成果のまとめではなく「出発」であるということです。授業改善のかけ声が至る所で聞こえますが、実際に東京都の美術の授業が10年前と比較して変化しているか、自分たちが中学時代に受けてきた美術の授業をそのまま再生産していないか...、その点を問う必要があります。もしかしたら、今回の大会は、明日の授業にすぐに生かせるというものではないかもしれませんが、しかし、研究大会だからこそできる・・・また、大会でなければできない・・・そのような内容にあえて取り組むことで、美術の授業の在り方を考えていく素材を提供し、今後、さらに都中美で研究を継続し、深め、発展させていく、その契機としたいと考えています。

第二は、授業を考える視点として、多様な「かかわり」の場面を作り出すことに重点を置いていることです。本大会では「かかわり」ということを、大きく次の二点からとらえています。一つは美術館を授業の場としたり、小学生や大学生あるいは作家と連携したりして、授業の新たなフレーム（形態）や組立て（構造）を提案すること。そして、もう一つは、「ひと、モノ、場（環境）」など、生徒の造形活動に豊かさをもたらすテーマや材料等との出会いやかかわりを通して授業の充実を図ること。本大会では、前者を「鑑賞」、後者を「表現」の中で追究していますが、いずれも、今後の美術の授業を考えていく上で重要となる諸条件の再構築を目指すものです。

今回の大会の推進にあたっては、日頃から教育普及に力を注いでいる府中市美術館の多大な協力を頂きました。そのような関係諸機関や他校種などとも積極的に連携しながら、今回の大会テーマである「人間力」の育成を追究し、美術教育の可能性を拓く大会としていきたいと考えています。

現在、各学校では新学習指導要領の趣旨の理解に努め、その具体的な実施に向けて検討を進めているところです。以上の二つの柱に基づいて展開される本大会が、新学習指導要領の趣旨に基づく授業改善の一助となるとともに、今後の美術教育の活性化に結びつくことを期待してやみません。

最後になりましたが、本大会の内容について今後に向けた価値付けをしていただきます文部科学省初等中等教育局教育課程課の村上尚徳教科調査官をはじめ、各分科会の助言者の先生方、また、人間という大きな視点から美術をとらえた貴重なご講演を頂戴いたします東京藝術大学准教授の布施英利先生、並びに多大なご支援をいただきました東京都教育委員会、北多摩各市の教育委員会、東京都中学校長会ほか、関係の皆様方に御礼を申し上げ挨拶いたします。

大会要項と内容

- (1) テーマ 人間力をはぐくむ美術教育～いま、求められる創造性～
豊かな「かかわり」を生み出す美術の授業
- (2) 開催日 平成21年 1月16日(金)
- (3) 会場 府中市立浅間中学校
府中市浅間町1-1 Tel: 042-360-0031
府中市美術館
府中市浅間町1-3
- (4) 主催 東京都中学校美術教育研究会
会長 牧井 直文(中野区立中野富士見中学校長)
- (5) 後援 東京都教育委員会 立川市教育委員会 武蔵野市教育委員会
三鷹市教育委員会 府中市教育委員会 昭島市教育委員会
調布市教育委員会 小金井市教育委員会 小平市教育委員会
東村山市教育委員会 国分寺市教育委員会 国立市教育委員会
狛江市教育委員会 東大和市教育委員会 清瀬市教育委員会
東久留米市教育委員会 武蔵村山市教育委員会 西東京市教育委員会
東京都中学校長会 東京都中学校教育研究会
府中市中学校長会 府中市小・中学校図画工作・美術教育研究会

(6) 時 程

10:00	11:00	12:00	13:30	14:30	15:25	16:00	17:00
受付	公開研究授業 1～3	展示作品鑑賞	昼食	公開研究授業 4～5	分科会 1～6	研究会 講評 大会	記念講演
府中市美術館			移動	府中市立浅間中学校			

(7) 公開研究授業1～3 11:00～11:50 場所 府中市美術館

- 牛島憲之の作品鑑賞を味わう(常設展示の鑑賞)
発表者 府中市立府中第三中学校 教諭 遠藤真木子
府中市美術館 学芸員 武居 利史
- ビエンナーレ作品鑑賞(企画展)
発表者 東大和市立第二中学校 教諭 未至磨明弘
府中市美術館 学芸員 成相 肇
- ビエンナーレ作家との協働制作による授業「352人の小さなノート」
発表者 府中市立府中第八中学校 教諭 中川 園子
府中ビエンナーレ出品作家 原 高史氏

(8) 公開研究授業 4 ~ 6 13:30 ~ 14:20 場所 浅間中学校

- 4 人とのかかわり ~ 小学生と中学生が共同で行う作業 (新聞紙を使って)
発表者 東久留米市立東中学校 教諭 藤井 義法
武蔵野市立第三中学校 教諭 三浦 悦子
武蔵野市立第六中学校 教諭 市野 美香
府中市立若松小学校 教諭 大杉 健
- 5 モノとのかかわり ~ 木から小刀でつくる「府中の森の守り像」
発表者 西東京市立田無第四中学校 教諭 木原 美恵
- 6 場 (環境) とのかかわり ~ 自分をとりまく世界 (事象と自分の距離)
発表者 国分寺市立第五中学校 教諭 北澤 昭俊

(9) 分科会 1 ~ 6 14:30 ~ 15:10

- 分科会 1 鑑賞 1 「牛島憲之記念館の鑑賞」 【視聴覚室】
助言者 東京都教職員研修センター 教授 松井 一雄 先生
- 分科会 2 鑑賞 2 「府中ピエンナーレの鑑賞」 【会議室】
助言者 武蔵野美術大学 教授 三島 一美 先生
- 分科会 3 鑑賞 3 「ピエンナーレ作家とともに」 【図書室】
助言者 東京都教育庁 指導部 義務教育特別支援教育指導課
指導主事 松永かおり 先生
- 分科会 4 表現 1 ~ 人とのかかわり 【技術室】
助言者 東京都教職員研修センター 教授 岡本 正巳 先生
- 分科会 5 表現 2 ~ モノとのかかわり 【第1美術室】
助言者 山梨県教育庁 義務教育課 指導主事 鷹野 章 先生
- 分科会 6 表現 3 ~ 場 (環境) とのかかわり 【第2美術室】
助言者 渋谷区教育委員会 指導主事 横山 圭介 先生

(10) 全体会・講演 15:20 ~ 17:00 場所 浅間中学校武道場

- 開会の言葉
主催者挨拶 東京都中学校美術教育研究会会長
中野区立中野富士見中学校長 牧井 直文
- 実行委員長挨拶 大会実行委員長 府中市立府中第五中学校長 中村 一哉
- 来賓祝辞 府中市教育委員会教育長 新海 功
- 来賓紹介 東京都教育委員会義務教育特別支援教育指導課
指導主事 松永かおり 先生
- 基調提案 大会研究局長 国分寺市立第一中学校 大澤 晃
- 講評 文部科学省初等中等教育局教育課程課
(国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官)
教科調査官 村上 尚徳 先生
- 記念講演 「美を自然から学ぶ」
東京藝術大学 准教授 布施 英利 先生
- 謝辞 大会副実行委員長 西東京市立ひばりが丘中学校長 大野 雅生
- 次回大会実行委員長挨拶 葛飾区立上平井中学校長 殿村 靖廣
- 閉会の言葉

大会テーマ 人間力をはぐくむ美術教育 いま、求められる創造性

豊かな「かかわり」を生み出す美術の授業

大会研究局長 国分寺市立第一中学校

基 調 提 案

大澤 晃

今、子どもたちを取りまく社会環境は、再生困難な森林破壊、海洋にまで広がる環境汚染やエネルギー問題、人間性を疑問視する犯罪の増大、まともに働いても将来が不安な経済の先行きなど、厳しい条件が山積している。これはやがて社会人となる子どもたちにとっても大きな問題になることは必至である。現在の社会では、加速的な社会変革の波が次々に押し寄せ、常識が瞬く間に変わってしまう。もはや先のことは容易に予測がつかない状況になっている。しかし、子どもたちはそうした中でも創造的にたくましく生きる力を身に付け、自分の人生を切り開いていかななくてはならない。新学習指導要領でもそうした背景を踏まえながらしっかりと自らの人生を築いてゆくために学習する力、それを生かす力をより一層重視し、学習によって自らを成長させる資質を育むことを明確に打ち出している。

さて、人は環境で育つ。豊かな教育環境で育った子どもは、自ら学ぶ意欲をもって、学習する力が育つといわれる。とりわけ小学校、中学校の時期には地域の環境と深いかかわりを持ち、成長する機会が多い。この人格形成の時期における体験、経験こそが将来の基盤になる。この大切な時期を子どもたちがいかに過ごし、社会に出る前にしっかりとした基礎的な学習を行うかが重要である。そこで、本大会では、子どもが成長し、社会的に自立していく過程を教科教育という視点からとらえ、「人間力を育む美術教育 いま、求められる創造性」を大会テーマとして設定した。また、サブテーマの豊かな「かかわり」は、美術の授業を通して学習できる内容を明らかにするとともに様々な題材化の視点で魅力ある授業を展開するというねらいをもっている。

ところで、学習の大きな目的が自己の成長にあると考えるならば、とりわけ中学校の年代は最も大きな節目の時である。子どもから大人に向かって肉体的にも成長し、知的好奇心が高まり、同時に豊かな感性が伸びる大切な時期である。この時にこそ周囲を取りまく人や環境と豊かなかかわりを持ち、自己を成長させ、社会で生きるための様々な知恵を吸収し身に付ける必要がある。本大会では、そうした視点で、子どもとその周りの様々なかかわりに注目し、研究することとした。

また、本大会では府中市美術館のご協力を得て、同時期に開催される企画展に参加される作家の方々にもご協力を願い、子どもたちの新しい美術、芸術の芽を育てていこうとする試みにも取り組もうと考えた。最近の美術館の活動では、既成の評価が定まった作品や作家を扱うだけでなく、これから創出する新しい美術・芸術に対して学芸員が積極的に発表の機会を与え、美術館が価値を創成する起点となる役割を担うという活動も行っている。本大会ではこうした機会に鑑賞活動をさらに充実させて題材化を図り、一層魅力ある美術の授業が展開できるよう研究を進めたいと考える。

美術科としての研究課題

現在の極めて少ない美術の時間の中で、指導上、最重要と考える内容は何か、確かな力のつく授業とは？鑑賞力を高める指導とは？等々、美術という教科にとって課題は多い。近い未来に子どもたちが必要とする力とは何であるのか？例えば新学習指導要領にも明示されたコミュニケーション能力の育成を取り上げた場合はどうだろうか？現在の子ども達はどこにいても話ができる便利な道具を持っている。しかし、不特定多数の人間とメールのやりとりができて、教室ですぐ隣にいる人と上手くコミュニケーションができないという皮肉な状況がある。コミュニケーションの手段は、何も文字や言葉だけではない。形や色彩、音、パフォーマンスなど多様な手段、方法がある。当然美術の表現ではそれらを総合的に駆使し、表現手段として用いている。その表現の一つとして、今や映像はテレビやインターネット上で大きな力を発揮し、世界を動かしている。そうした情報を適切に判断し、読み取る力はまさに美術の授業で培う能力の一つである。そもそも美術という教科は思考力、判断力、表現力の育成に大きく関わる教科であり、それらを視覚的により具体化し、学習できる教科であるということを確認したい。

今回の研究テーマである創造性や豊かなかかわりは、人やモノ、地域、環境などとの様々なかかわり=コミュ

ニケーションを通して互いの関係を確認し、より深いつながりを見出すことによって、人間として大切な価値を発見し、現実生きる力としての人間力をはぐくむことができるとの認識に立ち、その過程で発想し、構想し、創造力を培うという美術科のねらいを実現することができるとの仮説に基づいて設定されたものである。そこで、本研究では、この「かかわり」について以下の三つの視点で考えることとした。

1 人とかかわる 美術

人は社会の中で、人とかかわりながら育つ。親と子、師弟、仲間といったかかわりは人が育つ上で重要な要素である。人は色々なかかわりを通して、社会に適合していく。そうした一連のかかわりはそこにある文化を伝えるという点でも欠かせない。おそらく美意識の根幹は人々のかかわりから生じ、それを共有することでまた新たな時代の文化が形成されると考えられる。

美術の授業でよく取り上げられる作家、ゴッホやゴッディンも互いに求め合う普遍的な美を共有しつつ互いを刺激し合うことで、新たな発想を生み出し、創造の源を得たように人と人とのかかわりこそ自己を成長させる上で大きな力になることが多い。美術の活動では作品づくりを通して互いの違いやよさを認め合うことをはじめ、具体的な芸術体験を通して学習を共有できるというよさがある。本研究では、そうした学習効果を確かめながら、美術の活動を通して人とのかかわりを広げ、深めていけるような方途を考えたい。

2 モノとかかわる 美術

世界にはさまざまな建造物が存在するが、それら建造物はその地域にある材料を生かしてつくられている。こうした材料、素材とのかかわりは、人々の長い暮らしの中で有効に資源を活用しようとする人々の知恵から生まれている。モノとのかかわりを知ることは、限られた資源をより継続的、有効に利用していこうとする未来に向けて必要不可欠な学習である。匠に学ぶ伝統の技は、けっして先達の技術的遺産を継承することのみではなく、技術革新によって受け継がれ、さらに磨かれている。その中には、目先の利益にとらわれすぎず、基礎的な研究で大きな成果を得ている例が多い。一見何の関係もないような材料、技術を他に転用することで意外な発見や利益が生まれる。それは過去の発展の歴史からも見てとれる。こうした柔軟な発想も、もとはといえば人とモノとのかかわりが出発点となっている。いまや流通経済の大きなうねりの中にあって国際的な事柄に無関心ではられない状況にある。そうした中で、現代美術が提唱する問題は素材そのもののもつ意味を作品としている例が少なくない。モノとのかかわりを考えることは、もう一度表現そのものの意味を問い直すことでもある。

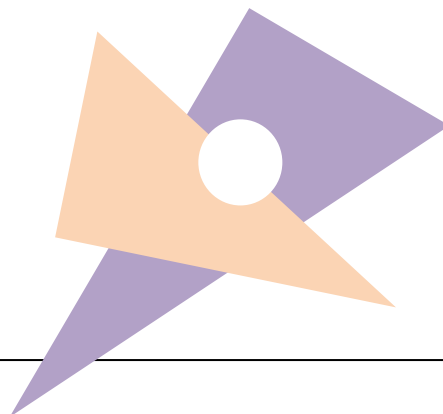
3 環境とかかわる 美術

人を取りまく空間や場を共有することでかかわりを深め合うことは多い。家族、地域、学校など、そこに暮らし、知恵を育み、周囲の環境に対する考え方が培われる。人はもともと家族という場で最初に人と人とのかかわり方を学び、さらに地域社会の中で様々なかかわりをもちながら成長する。その場や空間、環境は成長の過程で大きな影響を与える。当然それはまた美意識にも深く関わってくる。美術の授業で取り上げることが多い茶室建築を例にとれば、その空間全体が茶道の精神性を集約した意味をもった場である。また、幾多の年月を経て世界遺産に指定されるようなさまざまな建造物などは祈りを形にしたものが少なくない。それは単なる建造物ではなく、人々の精神的なバックボーンとなるような価値をもつものであり、そこに集う人々の生活にも深い関わりをもっている。このような環境とのかかわりは、美術では重要な要素である。とりわけデザインの学習では、そうした総合的な環境とのかかわりをユニバーサルデザイン、エコデザインなどで生活を快適に、豊かにできるような学習を展開している。本研究では環境とのかかわりを考えることが表現の意味を探究する学習や次の世界を創造する学習にもつながると考える。

これら上記の内容を起点に、研究を進めることを基調提案としたい。

記念講演

講師紹介



東京藝術大学

准教授

布施 英利 先生



「美を自然から学ぶ」

プロフィール

1960年生まれ。芸術学者。

東京藝術大学美術学部芸術学科卒業。同大学院修了（美術解剖学専攻）。学術博士。
東京大学医学部助手（解剖学）として養老孟司教授のもとで研究・教育に従事した後、2003年より現在まで東京藝術大学准教授。

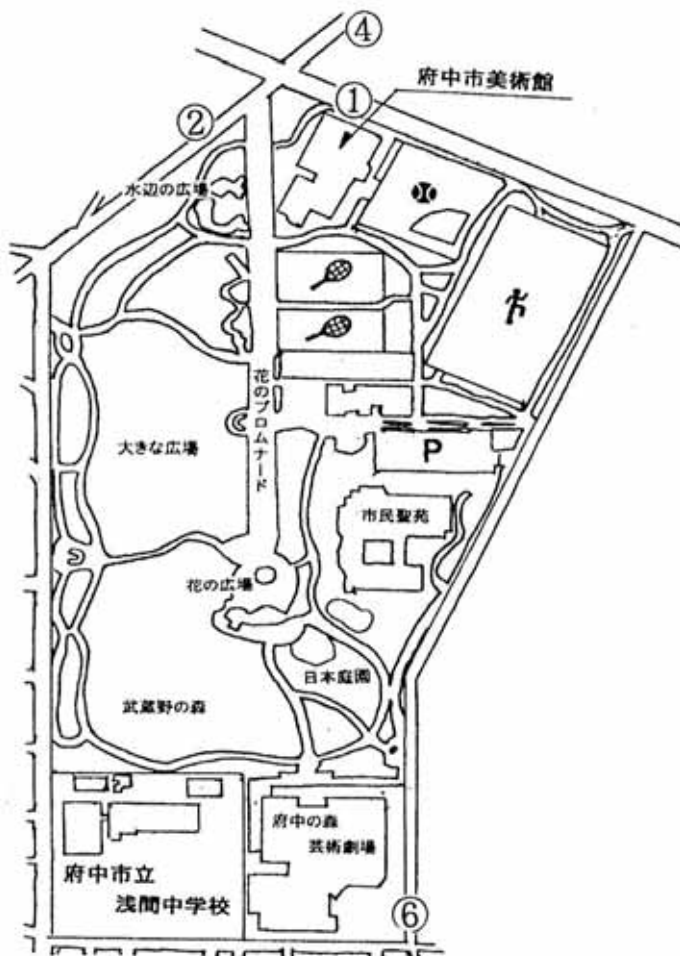
人体や自然の美と、芸術の美の探究に取り組んでおり、レオナルド・ダ・ヴィンチをはじめ、ヨーロッパや日本の芸術を幅広く研究している。

大学院在学中の『脳の中の美術館』（ちくま学芸文庫）でデビュー。以降の著作は約35冊になる。

主な著書は「絵筆のいない絵画教室」「体の記憶」「鉄腕アトムは電腦羊の夢を見るか」「マンガを解剖する」「君はレオナルド・ダ・ヴィンチを知っているか」など。

小学生に美術教育をした『絵筆の中の絵画教室』（紀伊国屋書店）などがある。

最新刊は『体の中の美術館』（筑摩書房）。



府中市美術館 交通案内

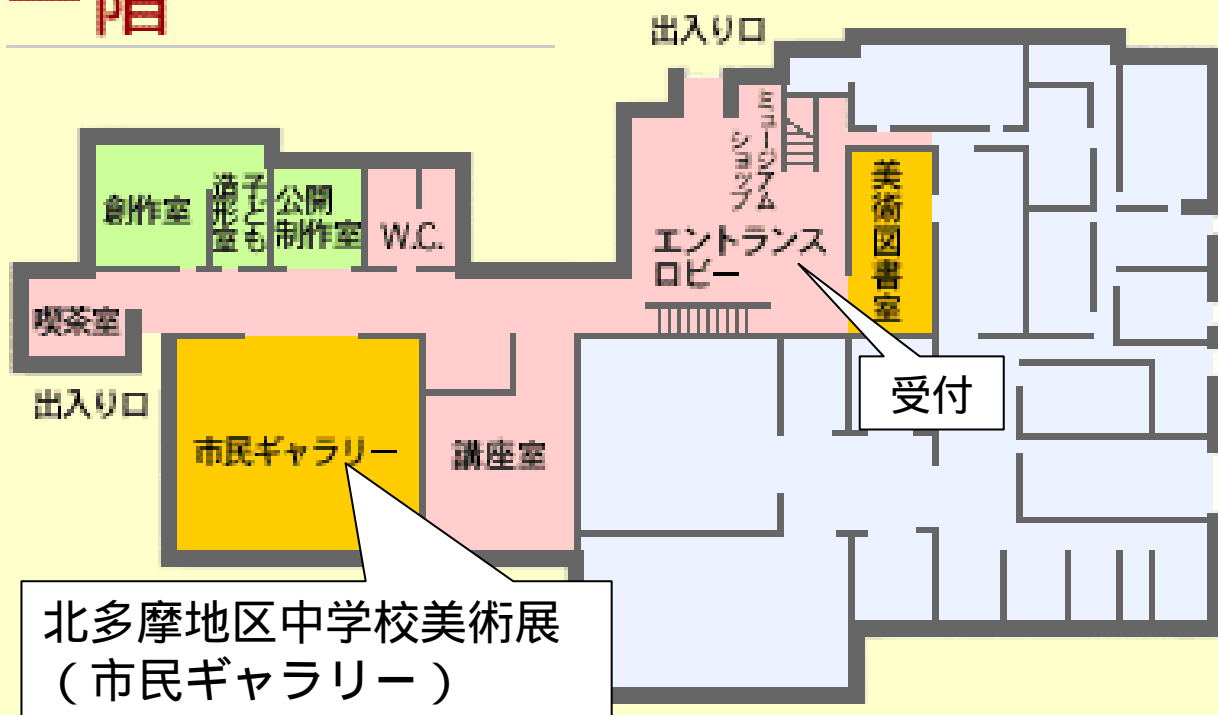
- 京王線東府中駅北口から徒歩15分
- 京王線東府中駅北口からバス
 - ・ちゅうバス府中駅行き「府中市美術館」①下車すぐ
(8:05から30分間隔で運行)
- 京王線府中駅からバス
 - ・ちゅうバス多磨町行き「府中市美術館」下車すぐ
(8:00から30分間隔で運行)
 - ・武蔵小金井駅行き(一本木経由)
「天神町二丁目」②下車すぐ
 - ・武蔵小金井駅行き(学園通り経由)「天神町幼稚園前」
③下車徒歩5分
- JR中央線武蔵小金井駅からバス
 - ・府中駅行き(一本木経由)「一本木」④下車すぐ
 - ・府中駅行き(学園通り経由)「天神町幼稚園前」
⑤下車徒歩5分

府中市立浅间中学校 交通案内

- 京王線東府中駅北口から徒歩10分
- 京王線府中駅北口から徒歩22分
- 京王線府中駅からバス
 - ・ちゅうバス多磨町行き「芸術劇場」⑥下車徒歩1分
(8:00から30分間隔で運行)
 - ・武蔵小金井駅行き(一本木経由)「第二小学校」
⑦下車徒歩5分
 - ・国分寺駅行き(学園通り経由)「府中三郵便局」
⑧下車徒歩8分
- JR中央線武蔵小金井駅からバス
 - ・府中駅行き(一本木経由)「第二小学校」下車徒歩5分
- JR中央線国分寺駅からバス
 - ・府中駅行き(学園通り経由)「府中三郵便局」 下車徒歩8分

府中市美術館内 会場図

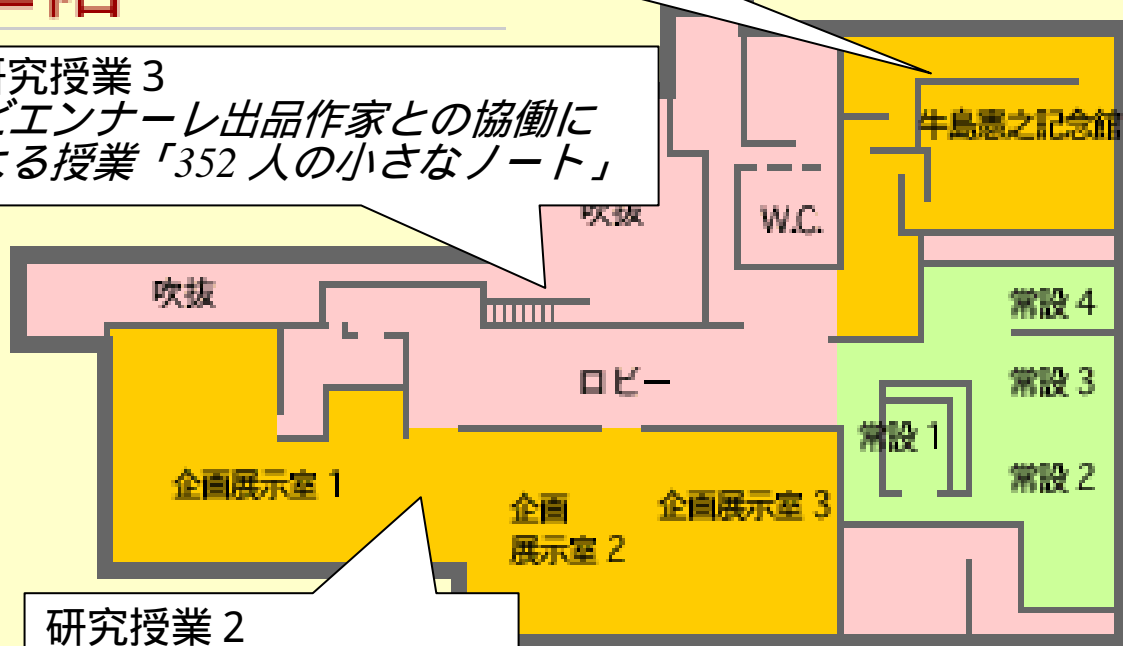
一階



研究授業 1
牛島憲之の作品を味わう
(常設展示の鑑賞)

二階

研究授業 3
ビエンナーレ出品作家との協働による授業「352人の小さなノート」



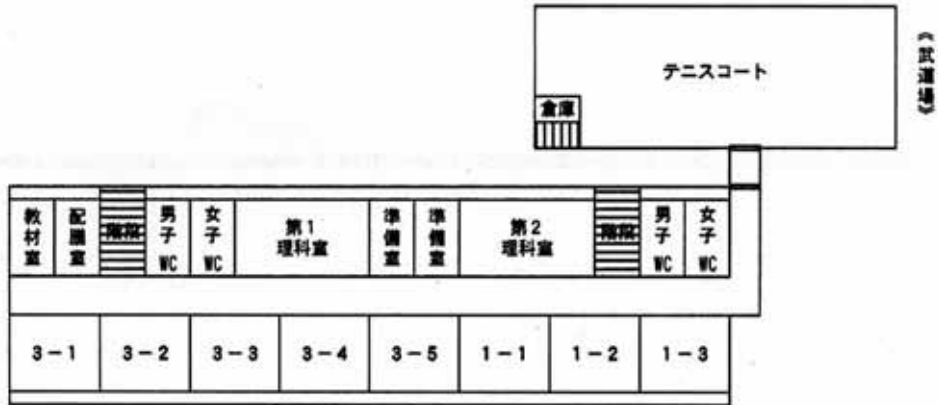
研究授業 2
ビエンナーレ作品鑑賞

府中市立浅间中学校 校内配置図

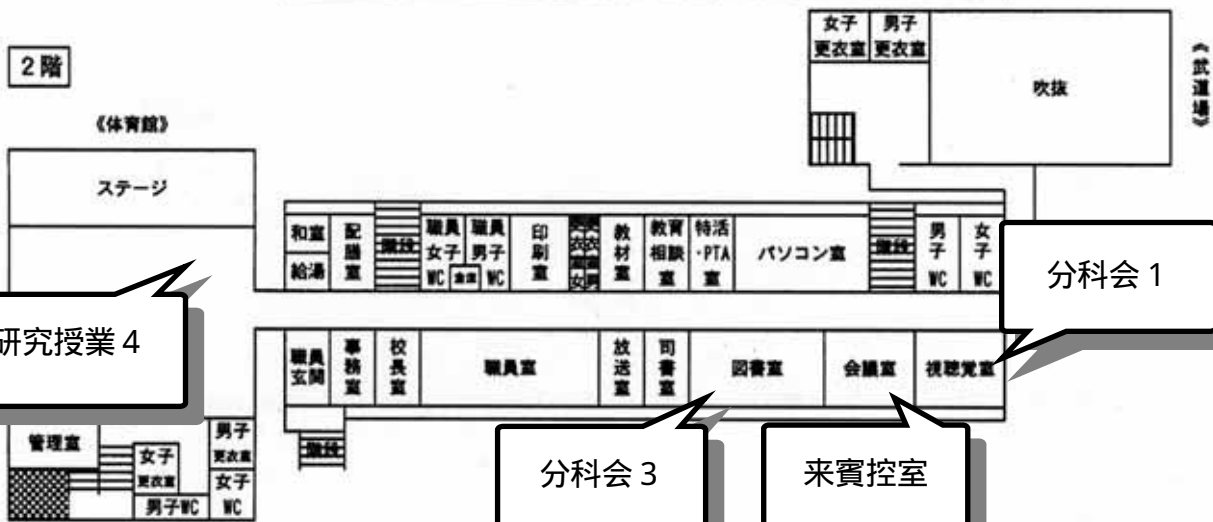
4階



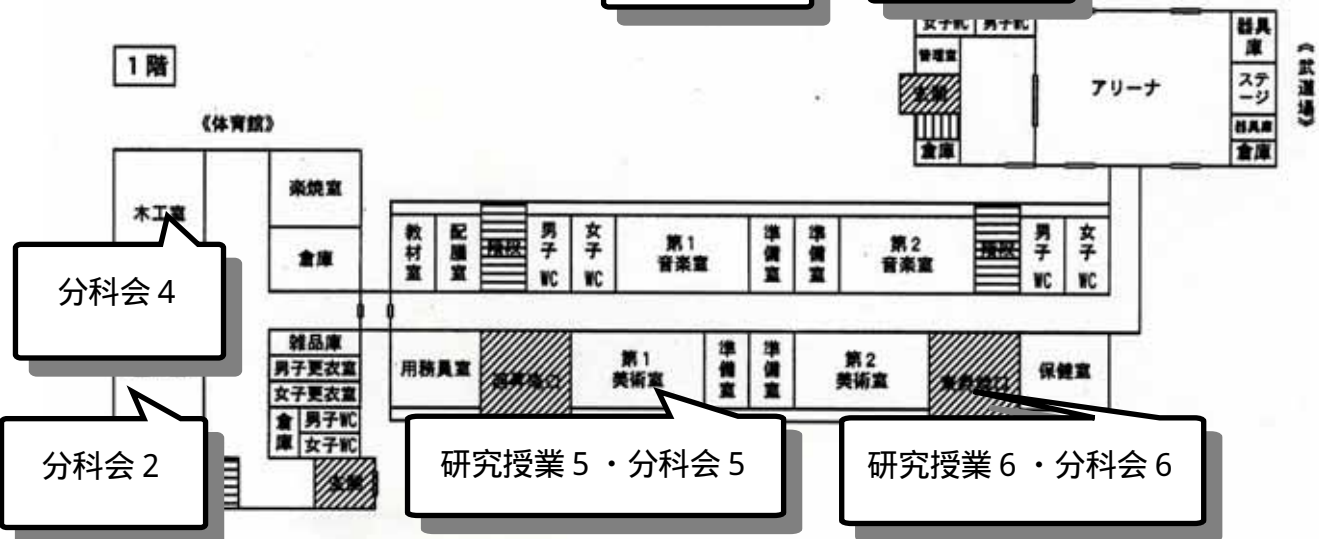
3階



2階



1階



第4回府中ビエンナーレ トゥルー・カラーズ 色をめぐる冒険

多摩地域にゆかりのある作家を中心に、40歳以下の将来性ある若手作家を2年おきに紹介してきた「府中ビエンナーレ」。第4回目となる今回のテーマは、「色」です。

季節の変わり目に、屋外に出てふと新しい季節のにおいを感じたことはないでしょうか。「におい」といっても、それは嗅覚の刺激というより、温度だとか湿度だとか、光の具合や空模様、風の吹き方、自分の体内に湧き上がる感覚も含めて、じつに多様な要素が重なった予感を漠然と、しかしはっきりと、新しい季節の兆しとして感じます。

今回のテーマである「色」もまた、この「におい」に似ているかもしれません。味わい、ぬくもり、やわらかさ、といった視覚以外の感覚で何気なく色について語ることがあるように、色は決して数値で操作できるのではなく、もっと膨大な情報を含んで私たちに感じられるものではないでしょうか。一枚の絵画のたった一筆の塗り跡さえ、まさしく膨大な情報が含まれています。ある瞬間の、その場所にしか現れることのなかった色。そのかけがえのない色に出会うとき、私たちは作品に感動を覚えるのでしょうか。

テレビやパソコンと日々向かい合い、昼夜を問わず明るい照明の下で暮らす現代の日常。そこには多様な人工色が満ちている一方で、むしろ色彩が本来備えている豊かな味わいは均一化してきているかもしれません。そしてそれはまた、グローバリズムやコマーシャルリズムによって文化や社会全体が均一に同調していくかに見える流れとも結びつきます。こうした環境の中で、若い作家たちはどのような色彩表現を試みているのでしょうか。

今回のビエンナーレでは、色彩に強いこだわりや現代的な色彩感覚を持つ7名の作家たちを選出し、美術における色彩の意味、そして新しい色彩表現と芸術の可能性を探っていきます。

「色」という言葉がそのまま「個性」の謂いでもある通り、誰しものが数値に替え難い、自分にとって「じっくりくる色」を持っているはず。環境の変化に誰より敏感な若き作家たちの表現を通じて、私たち誰一人として無関係ではないこの「色」の本質に迫り、観客の皆様ひとりひとりの「トゥルー・カラー（真実の色）」を見つめ直す機会になれば幸いです。

成相肇（府中市美術館学芸員）

第4回府中ビエンナーレ トゥルー・カラーズ 色をめぐる冒険

会期：2008年11月15日（土） 2009年2月1日（日）

休館日：月曜日（祝日の場合は翌日）、12月30日～1月3日

開館時間：10：00～17：00（入館は16：30まで）

出品作家：

雨宮庸介（あめみや・ようすけ /
オブジェ、インスタレーション）

今澤正（いまざわ・せい / 絵画）



図1 雨宮庸介 knowledge 2006-2007

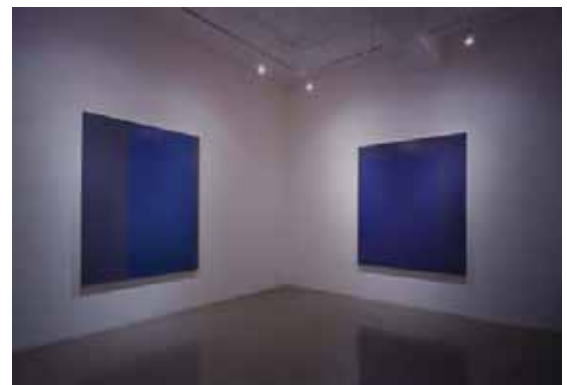


図2 今澤正 個展会場風景 2005

*原高史 (はら・たかふみ /
絵画、インスタレーション)

武藤努 (むとう・つとむ / メディア・アート)



図3 原高史 小さな声 2008



図4 武藤努 Optical Tone 2007

村山留里子 (むらやま・るりこ /
オブジェ、インスタレーション)

横内賢太郎

(よこうち・けんたろう / 絵画) 渡辺豊 (わたなべ・ゆたか / 絵画)



図5 村山留里子 無題 2005



図6 横内賢太郎
Book- SOTH PF1001 2007



図7 渡辺豊 ark #15 2008

* 出品作家7名のうち、都中美大会では原高史さんとのコラボレーションの授業を行います。

原高史 (はら・たかふみ 1968年生)

原高史は、インタビューや会話で人々が発した言葉をつめ、それを作品へと再構成します。《サインズ・オブ・メモリー》とよぶ公共空間のプロジェクトでも、漫画のコマ割形式を利用した絵画でも、その方法は共通しています。広告看板のように人工的で力強いフラットな色面が、日常の風景を異化し、個人の記憶を社会の歴史として浮きあがらせます。



図8 原高史 サインズ・オブ・メモリー
ベルリンアウグスト通り 2004

府中市美術館と教育普及活動

基本テーマは「生活と美術」

府中市美術館は、「生活と美術＝美と結びついた暮らしを見直す美術館」を基本テーマに、平成 12 年 10 月に開館しました。常設展とともに企画展を開催し、名作の鑑賞、学習、創作、発表の体験を通じて、身近に美術と出会える美術館を目指しています。

建物は、光と緑にあふれる公園との一体化を目指して、高さを低く抑え、ライムストーンやガラスなど自然の素材を用いて、外部空間との視覚的な連続性を作り出しています。1 階は無料で利用できる自由な空間であり、2 階は落ち着いた展示空間です。



緑豊かな公園の中にある府中市美術館の建物



牛島憲之《貝焼場（午後）》昭和 10 年
油彩・キャンバス、145.9×97.4 cm

常設展示室では、日本の近代洋画を中心とした収蔵品を常時展示しています。江戸後期の洋風画、明治の初期洋画をはじめ、近代洋画の形成と発展をたどる豊富なコレクションを特色とし、府中・多摩地域にゆかりのある作家・作品とともに、将来性ある若手作家の作品も収集しています。また牛島憲之記念館を併設し、日本の代表的な洋画家である牛島憲之（明治 33 年生 平成 9 年没）の作品を展示しています（ ）。

企画展と教育普及プログラム

企画展示室では、近世以降の日本と西洋の美術を中心とした幅広い展覧会を開催しています。企画展では、「マネ」展、「モーリス・ドニ」展などの西洋近代から、「司馬江漢」展、「亜欧堂田善の時代」展などの日本の近世、「もう一つの明治美術」展、「牛島憲之と昭和前期の絵画」などの近代、「高松次郎」展、「藪野健」展など現代作家の展覧会を開催してきました。

館内には、教育普及のための施設もあります。創作室・子ども造形室では、さまざまな技法や道具にふれる楽しさ、創作する喜びを体験できるワークショップなどの事業を行っています。公開制作室では、プロの作家を迎え、作品が作られていく過程を公開しています。市民ギャラリーは、作品の発表の場として市民に利用されています。

そのほかにも、美術館講座、ギャラリートーク、ミュージアムコンサートなど多彩な教育普及プログラムを用意しています。

美術図書室は、主に近・現代の美術に関する画集や美術雑誌、事典等が閲覧できます。館内には、ミュージアムショップ、喫茶室もあり、市民の憩いの場となっています。また地域の NPO と共同してボランティア育成を行うなど、市民参加を推進しています。

学校と連携した教育普及活動

開館当初から教育普及事業を大きな柱に取り組んできましたが、近年、学校と連携した事業が活発になっています。そこで基礎となっているのは、平成 13 年度から毎年実施している市教育委員会などが主催する美術鑑賞教室です。市立小学校の全 22 校が、第 4～6 学年のいずれかで団体鑑賞しています（ ）。また市立中学校の全 11 校が、美術館が作成した手引きを利用して、夏休みの宿題などによる自主的な個人鑑賞が定着しています。小学

校では、図工科教員と学芸員が事前に打合せを行い、細かな指導計画を立てて実施しているのも特徴です。

府中市教育研究会図工・美術部との連携も盛んで、夏休みの子どもたちを対象とした実験的な造形活動を行うワークショップも開催してきました。また、東京都図画工作研究会（都図研）や多摩地区図画工作教育研究会（多摩図研）と連携して、教員向けの研修会や研究授業などにも積極的に取り組んでいます。

今年度には、多摩地区図画工作教育研究会との共催で、府中市立若松小学校とも共同して、公開制作作家と4回にわたるイベント「ドラゴンチェアー 開発好明さんとドンドン伸ばして世界に届け！」に取り組みました（ ）

また平成18年12月には、東京都図画工作研究大会北多摩大会が、府中市立若松小学校とともに美術館で開催されました。美術館との連携をテーマとする分科会も設けられ、学芸員と教員が議論をかさね、学校との多角的な連携のあり方を探究しました。その成果をもとに、文化庁芸術拠点形成事業として『学校向け美術館利用ガイド』を発行し、東京・多摩地域の小・中・高の全学校に配布しています（ ）

ティーンズのためのプログラムも

そのほか美術館では、子どもや親子で参加できるワークショップ、市の保育課と連携して0歳児とその保護者のためのプログラム「はじめてアート」を実施し、子育て世代の要望に応える企画を行っています。

夏休みには、キャラクター「ぱれたん」を案内役とする常設展特集を開催するなど、子どもの関心を生かした展示に取り組み、全館をあげて子どものための企画の充実を図っています。

また昨年度から、美術への関心を高めるうえでもっとも大切な時期である10代の青少年のためのプログラム、ティーンズスタジオ「土曜工房」を実施しています（ ）。美術系大学で学んだ若手の指導員、NPOやボランティアとともに、日々成長する世代に向けた教育普及活動に取り組んでいます。中学生や高校生を対象とした美術館でのプログラムは全国的にもめずらしく、これからの大きな課題です。

また館内の市民ギャラリーでは、隔年2月に「府中市立小中学校連合図工・美術展」、毎年1月に「北多摩地区中学校美術展」の会場として、子どもたちと教員の発表の場としても活用されています。このように府中市

美術館は、学校との連携においても、鑑賞・創作・発表・研修・研究といった多面的な役割を担っています。東京都中学校美術教育研究大会の開催を機に、中学校の分野でも、新しい前進と飛躍を図っていきたくと考えています。



小学校美術鑑賞教室で解説する成相筆学芸員
(平成20年7月)



学校と連携した開発好明氏のプロジェクト
「ドラゴンチェアー」(平成20年7月)



『学校向け美術館利用ガイド』
『美術鑑賞教室のてびき』等の教材



ティーンズスタジオ展 2008「10×10展(ひゃくてん)」(平成20年10月)

武居利史（府中市美術館教育普及担当主査）

研究主題（題材）	牛島憲之の作品を味わう 常設展の鑑賞 （第2学年）	領域	鑑賞
提案者	府中市立府中第三中学校 遠藤 真木子 府中市美術館 学芸員 武居利史・成相 肇		
研究の視点	<ul style="list-style-type: none"> ・美術館との連携 ・常設展示作品の鑑賞を通して、美術館鑑賞の日常化を図る 		

< 題材設定の理由 >

学校と美術館の連携について、府中市においては「府中市立小中学校美術鑑賞教室」を中心に実践を重ねてきた。これは、市内の小学校4～6学年および中学校の1学年を対象としたものである。小学校では学年単位の団体鑑賞、中学校では各校の鑑賞計画にもとづいた個別鑑賞により実施している。特に中学校では、生徒が夏休みなど長期休業を利用し、個別に美術館を訪れ課題に沿って鑑賞するという活動が中心である。しかし、このような形態は鑑賞活動の学習としての意味付けが、生徒の興味・関心に左右されるという課題がある。そこで、今回の授業では、新学習指導要領の取扱いを考慮し、学習としての鑑賞活動を明確にした、美術館での鑑賞授業を設定する。

題材は、美術館に併設された「牛島憲之記念館」での鑑賞とし、日常生活の場にある地域の美術館の常設展示作品を対象とする。これにより、身近な地域の文化的資産に関心をもたせるとともに、その作品の魅力やよさを十分に味わわせたい。また、まとまったコレクションの鑑賞は、一人の美術家の作品を同時に複数観ることが可能であり、その画家の生き方や人間性についても学ぶことができ、美術作品の鑑賞の視点を深める有効な題材である。

授業を組み立てるにあたり、本授業を担当する教育普及担当学芸員と話し合いを重ね、牛島作品の魅力として以下の5点を確認し、授業展開のキーワードとしてとらえることとした。授業の中ではこの魅力が十分に味わえるようにしたい。

1. 身近な都市や自然の情景を描いた生活感のあるモチーフ（主題）
2. 繊細な色彩と構築的な形態による想像力を活かした造形（造形）
3. 点描や塗り重ねなど絵の具や筆の使い方を工夫した技法の豊かさ（技法）
4. 年代による色づかいやモチーフの形態にみられる作風の変化（作風）
5. 季節感のある日本の風土に根ざした表現（背景）

鑑賞は単に知識や作品の価値を学ぶだけの学習ではなく、知識なども活用しながら、自分の中に「作品に対する新しい価値」をつくりだす学習である。各生徒が作品から受ける感じや思いを、お互いに述べ合うことにより、一人では気付かなかった視点や価値に気付かせ、作品をより広く、深く鑑賞させたい。それは、新しい学習指導要領に示されたこの学習を通し、一人でも多くの生徒が身近な美術館に、お気に入りの1点を持ち、心豊かに成長してくれればと思う。

< 学習の展開 > 2時間設定

事前授業（50分）

美術室にて、美術館に展示されている作品数点を、プロジェクターによる画像を用いて、鑑賞する。ワークシートを活用し、生徒同士の意見交換を行う。

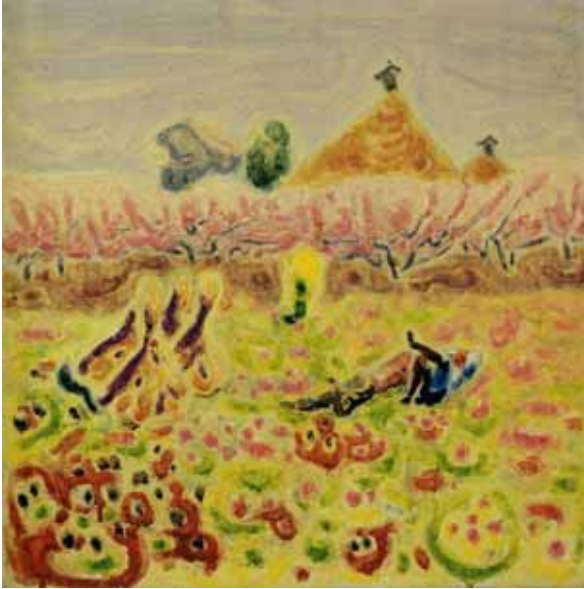
美術館での鑑賞（50分）

今回の展示テーマ「季語の情景」より、それぞれの四季を表現した四作品をあらかじめピックアップしておき、それらを中心に、学芸員を交えギャラリートークを行う。

< 牛島憲之記念館について >

牛島憲之記念館は、遺族から寄贈を受けた約100点の作品を中心に、様々なテーマで作品の展示がされている。牛島憲之の作品は、すでに多くの美術館に収蔵されているが、独自の展示施設があるのは府中市美術館のみである。親しみやすい作風が、美術館の基本テーマ「生活と美術＝美と結びついた暮らしを見直す美術館」と合致し、府中市美術館の特色の一つとなっている。

< 府中市美術館 牛島憲之記念館 所蔵品 より >



「春昼」昭和13 - 14年頃



「白南風」昭和63年頃



「冬」昭和39年頃



「麦秋の道」昭和30年頃

研究主題（題材）	美術大学や作家との交流を深める	領域	鑑賞
提案者	東大和市立第二中学校 未至磨 明弘		
研究の視点	人との関わり 「本物を鑑賞する」ことで美の感動を味わう (武蔵野美術大学生とともに授業を展開する = むさしとヤマト アートプロジェクト)		

題材設定の理由


本研究主題は東大和市立中学校美術部会として、ここ数年取り組んでいるものである。近年、美術館での鑑賞やワークショップの活動など、ユニークで興味深い報告がされている。その多くは美術科教諭以外の美術に関わる作家や学生との交流が日常の授業に比べて新鮮で、生徒が興味をもって取り組めるからであろう。もちろん、日頃の美術科による授業の充実が何より大切なことであり、本研究主題はその上に成り立つものである。これまで人間が人との出会いやかかわりによって文化や芸術を創り上げてきたように、生徒にとっても新たな出会いにより自己の視野を広げ、人間と美術の関わりを考えるきっかけになればと思う。また図版や写真ではない本物の美術作品を観ることで素直な感動を呼び、作家の意図や心情を想像することを通して生徒の人間的な成長につなげていきたいと考える。

指導のねらい

- 1 「本物」を鑑賞することでそのよさや美しさなどを素直に感じ取る。
- 2 作者の思いや考えを想像しながら鑑賞し、人と美術のかかわりについて興味をもつ。
- 3 鑑賞した内容の発表を通してお互いを理解する。

学習の展開

本題材実践 に向けての 経過	<p>H17.8 夏季休業中に武蔵野美大訪問、意見交換（この時点では実現は不可能）</p> <p>H19.8 夏季休業中に武蔵野美大訪問。教職課程教授と懇談（実現の可能性）</p> <p>H20.6 具体的な交流方法にむけて依頼（実現に向けての依頼及び交渉）</p> <p>8/21 武蔵野美大教授をお迎えし研修会（会場：東大和市立第二中）</p> <p>9/ 9 武蔵野美大にて第1回研究授業内容の打ち合わせ。授業参加者の募集、内容の検討など</p> <p>10/14 武蔵野美大にて第2回打ち合わせ。授業内容の決定、準備（この後も随時行う）</p> <p>11/5 東大和二中にて美大生と共に授業（下記指導案の内容）</p> <p>11/下旬 研究大会公開授業について打ち合わせ</p> <p>12/下旬 美大生と美術館実地踏査、浅間中生徒への事前指導</p>
----------------------	--

美大生（武蔵野美術大学）との連携による鑑賞授業	導 入	<p>対象：第1学年3クラス クラスごとに美大生が入れ替わる。</p> <p>2校時 9:50～10:40 1A（日本画科学生Iさん：作品はP20）</p> <p>3校時 10:50～11:40 1B（油絵科学生Tさん：作品はF80, F20）</p> <p>5校時 13:35～14:25 1C（日本画科学生Iさん：作品はF0×3）</p> <p>放課後は作品とワークシートを美術室前に展示（週末まで展示しておく）</p> <p>本日の鑑賞について説明をする。 鑑賞の条件を提示する。（鑑賞上のマナーを含む） グループごとに行う。 ワークシートにしたがって鑑賞する。 発表をすることで意見を聞きあう。 ワークシートを用意する。 （ワークシートは美大生によるもの） 内容は「作品のタイトル」「疑問や発見」 「作者に聞きたいこと」「感想」など</p>	 <p>1Aでの鑑賞作品</p>
-------------------------	--------	--	---

展開



1 Bでの鑑賞作品

鑑賞開始

授業の司会進行は美術科が行う。
ワークシートしたがって記入しながら鑑賞を行う。
感じたことや発見したこと、疑問に思ったこと発表する。
生徒の発表を板書しておく。

ここで美大生が登場する。

生徒の発表に応える形で美大生（作者）から説明する。
なるべくコミュニケーションのやりとりができるように・・・。

まとめ



1 Cでの鑑賞作品

美大生にお礼
最終的な感想等をワークシートに記入する。

美しいものや人が創り上げたものに対して
大切にしよう呼びかける。

放課後展示を行い、3クラスの作品やワークシートがお互いに見られるようにする。
（週末まで展示を行う）

評価

- (1) 本物の作品に触れ、感動や自分なりの感じ方をもつことができたか
- (2) ワークシートにより深まりのある鑑賞活動ができたか
- (3) 美大生やクラスメイトとの発表を通して、お互いを理解しようとしたか

1 / 16
研究授業

府中ピエンナーレの鑑賞



何だ、これは??



初めてみる大きな絵



さわってみる・・・



放課後の作品展示

活動する生徒（作品を近くでみる、さわってみる）。そして美大生登場！

研究主題（題材）	ピエンナーレ出品作家との協働による授業 「352人の小さなノート」（2学年）	領域	複 合
提 案 者	府中市立府中第八中学校 府中ピエンナーレ出品作家	中 川 園 子 原 高 史	
研究の視点	美術館・作家との連携		

題材設定の理由

中学生のこの時期、他者との関係をうまく取り合っていくことはなかなか難しく、メール等の交流手段の広がりとは反比例してコミュニケーション能力の低下が指摘されている。そこで、美術の活動を通して自分の思いを相手に伝える力と他人を思いやり、認める力を育てたいと考え、この題材を設定した。本題材では、学校で美術を教えている教師と、現在芸術活動を展開している作家とのコラボレーションによる授業という形で試行してみた。それは、作家との関わりを直接、体験することで美術の授業に対する意識を変え、新しい視点で創造することの面白さを感じるとともに、作家の創作活動にじかに触れることを通して美術への興味・関心がより一層高まるであろうと考えたからである。

指導のねらい

- ・作家とともに表現活動をすることで、ものを創造する態度への理解を深める。
- ・制作の過程を通して、自己の内面を深く見つめ、感じ取ることと表現の関わりに気付く。
- ・制作の過程の中で、疑問に思ったことや感じたことについて、自分なりに考え、新しい価値観を発見する。
- ・完成した作品を鑑賞し、生徒同士発表し合い、お互いのよさを認め、幅広く作品を味わう。

指導にいたる流れ

8月中旬

今回の共同授業者の作家の原高史さんと府中市美術館学芸員・武居利史さんとの初会合。第1回打ち合わせでは、一体どんなことができるのか、大まかな日程を決め、作家・教員との話し合いを重ねて作り出していく授業にすることを確認した。原さんから、生徒一人ひとりにインタビューをして、話を聞く中から今回のコラボレーション授業での内容を考えたいとの意向が出された。その際に、日頃から学校との連携に熱心に取り組んでいる美術館学芸員が作家との連絡調整を図ることを確認した。

9月14日

2回目の打ち合わせでは、「一人ひとり」「つながり」「一過性ではない」「ここでしかないもの」などいくつかのキーワードがあがった。また全生徒（第2学年）を対象とし、美術の苦手な生徒にも参加できるものにしようと決まる。そして原さんに中学校の現状、生徒の様子などを伝え、学校訪問日（下見）を決定した。

10月22日

学校訪問（下見）では、事前に生徒に簡単な紹介を行ったが、あまり先入観を与えるよりは、実際に作家に会ったときの印象を大切にしようとした。生徒は、大変好意的で、興味をもった様子であった。原氏には、学校の様子を見ていただいて、今後の予定を決定した。生徒へのいくつかの質問を事前に配り、それをもとに全生徒と個別に面談を行うことになった。

10月27日～29日（第1回目の面談）

個別面談当日は職員の朝礼で原さん、学芸員の武居さんを紹介し、学校全体にも周知した。職員の協力を得ることは大変重要であった。面談では事前に宿題とした質問のプリントの回収をした。プリントには思い思いの考えを書いてきた。美術とこの質問に何の関係があるのか、またどんな意味があるのか不思議に思う生徒や、興味津々の生徒たち。また質問について考えたことで今まで考えたことのないことに気が付いてよかったとの感想もあった。今回のこの過程は、1回1回記録として生徒自身にも書かせていった。今回の授業では内面の変化ということに重きを置き、生徒自身が疑問に感じたことなどを記録することで、考えを深めていくようにした。また面談は1時間の授業では終わらないため、2週に分けて行うことにした。

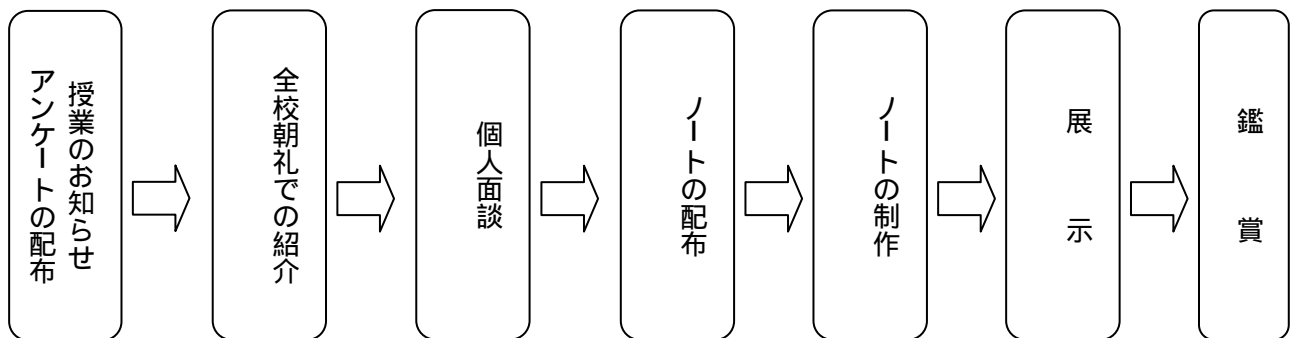
10月29日

3回目の打ち合わせで、生徒の個人面談をした原さんより「325人のちいさなノート」の案が提案された。それは、生徒一人ひとりに変形B6のノートを配布する。ノートには、いくつかの問いがあり、文字や絵をそこに描く。そこに仕掛ける内容(問い)について、「一人ひとり」「つながり」などについて深まるような発問を考えて意見交換を行った。325人の一冊一冊がどうつながっていくかは、今後の進展に合わせて考えていく。

11月以降

・・・このような準備をした後、これから生徒へのノートの配布、展示、鑑賞と展開する予定である。また、未知数ではあるが、その後どうなったかを大会当日の授業で発表する。

全体の流れ



(本題材の意義)

この取り組みを通して、作家とのコラボレーションによる授業の成果と課題は、次のような点にあると考えられる。

- 【成果】・生徒が、作家の創造活動に共に参画することによって、美術や表現に対する理解が深まる。
 - ・作家との会話や活動を通して、表現意図の表し方や表現手段の多様性などについて発見することができる。
- 【課題】・題材を学習指導要領の美術の目標や内容にどのように位置付けるかの慎重な検討が必要である。
 - ・予算面、時間的な問題など、具体的な準備の過程をどのように進めるのかが課題である。大会の授業、及び分科会で、意義や諸課題について検討し、可能性を模索したい。

個人インタビューでの様子



作家紹介

原 高史 takafumi hara takafumihara.com

1968年東京生まれ

1992年多摩美術大学絵画科油画大学院修了

2000年文化庁芸術家在外研修ベルリン

2002年 平成14年度ポーラ美術振興財団在外研修ベルリン

おもな個展

Wada Fine Arts (東京)、Y + + (北京)、DNA Gallery (ベルリン)

おもなグループ展

2008年赤坂アートフラワー、日本移民100周年SESC(ブラジル・サンパウロ)

2007年 Das abc dir Bilder 国立ペルガモンミュージアム (ベルリン)、Pocheon Asia ビエンナーレ (韓国)、

2006年、シンガポールビエンナーレ、KUNST SOMMER (ヴィスバーデン)、越後妻有アートトリエンナーレ

研究主題（題材）	小学生と中学生が共同で生み出す授業 （新聞紙を使って）（1学年）	領域	デザイン工芸
提案者	東久留米市立東中学校 藤井 義法 武蔵野市立第三中学校 三浦 悦子 武蔵野市立第六中学校 市野 美香 府中市立若松小学校 大杉 健		
研究の視点	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校と中学校の9年間を視野にいたれた美術教育プログラムの作成を目指して ・人や場とのかかわりを重視した造形活動 		

設定の理由

本研究では小学校と中学校の9年間を見据えた授業づくりに取り組み、小学校の教師が中学生を指導したり、中学校の教師が校区内の小学校で出張授業を行ったりして、主として指導者の立場から、児童・生徒の発達段階の掌握という視点を踏まえて小・中連携の考察を進めてきた。ここでは、図画工作科と美術科の教科内容の連続性に視点を当て、小学6年生と中学1年生が共同で活動する姿を通して、考察を深めたいと考えた。

事前の研究授業でも新聞紙という身近な材料を使って、体全体の感覚を働かせ、共同の活動を通して子どもたちが試行錯誤することをねらいとして行った。小学生ならではの感性と中学生ならではの感性が互いに響き合いながら協力し、材料（新聞紙）と場所（体育館）を自分たちのものにしていく過程を見守る教師の在り方の追求も本研究の課題である。

活動内容としては、図画工作科の造形遊びを取り上げ、中学美術科では「デザイン・工芸」の学習内容に位置付けて実施し、その連続性を下図のような対応で考えることとした。

	図画工作科（小学校5・6年）	美術科（中学校1年）
内容	A表現（1）ア *造形遊び 材料や場所などの特徴をもとに発想し、よさや美しさなどを考え、想像力や創造的な技能などを総合的に働かせて楽しく表現すること。	A表現（2）ア *デザイン・工芸 形や色彩、材料、光などがもたらす性質や感情を理解し、機能的な生かし方を考え、美的感覚を働かせて美しく構成したり装飾したりすること。
	B鑑賞（1）ア 自分たちの作品や表し方の変化などに関心をもって見るとともに、表現の意図や特徴をとらえ、見方や感じ方を深めるようにすること。	B鑑賞（1）ア 作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを理解し見方を深め、作品に対する自分の価値観を持って批評し合い、よさや美しさを幅広く味わうこと。

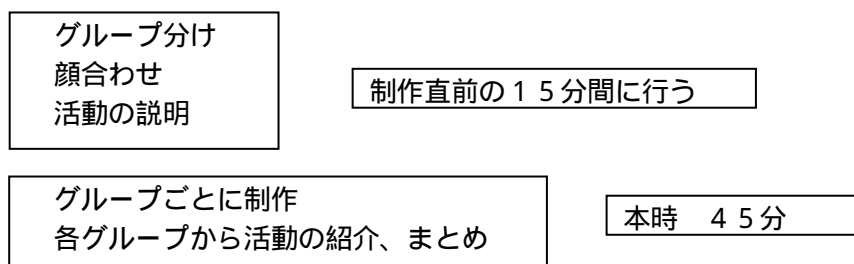
昨年度の反省で児童・生徒同士の作品を見合う時間が必要という意見から、他のグループの作品を見わたす鑑賞の時間を取った。また、グループで題名を考える活動を入れることにより「造形遊び」として終わらせず、自分たちの活動を肯定的に認識することを意図した。このことは新指導要領の鑑賞の「言語活動」に当たると考える。

実際は2時間分の活動内容であるが、現実には1時間（50分）の授業しかないため、グループ分けや自己紹介を事前に行うことにした。さらに、後日感想を書かせて交換したり、作品の写真を展示したりすることによって本時の活動のふり返りを深めた。

指導のねらい

- ・材料や場所などの特徴をもとに発想し、アイデアを出し合い、グループで協力して活動することを楽しむ。
- ・材料や場所などの性質や感情を理解し、美的感覚を働かせて美しく構成、装飾する。
- ・表現の意図や創造的な工夫などを理解し、自分の価値をもって批評し合い、よさや美しさを幅広く味わう。

指導計画 1時間 = 45分（本時）



作品写真展示
感想の交換

事後 各学校にもどってから別時程で行う

その他 活動の様子と作品



とにかくつけていこうで一致



展示場所を探す



ひとつずつ相談しながら進めたグループだった。
題名は…「情報カーペット」



新聞紙の折り紙で箱を作る
が、自立せず。
中に芯を入れる工夫を。
題名 「ハコ」



試行錯誤 なかなか決まらない。



6年生が新聞紙を体育館いっぱいに広げ出す



ラスト10分で仕上げる。
題名 「長いですね」

研究の成果と課題

事前の授業では、中学生も小学時代「造形遊び」を経験しているにもかかわらず、新聞紙という材料を前に何をしてもよいかわからない様子が見られたので、今回は中学生に事前に「現代アート」の学習をし、造形遊びの経験を思い出させた。参観者から「中学校の授業に小学生が参加したような…」と言う評をいただいたのは、中学生に「作品に仕上げなければ！」という意識があったためと考えられる。材料と遊ぶことは造形活動と何ら隔たりのない行為である。図画工作で育てた身体的な造形の感覚を中学校美術でイメージを基により高度に発想し、表現として創造させるべく美術教育を9年間と考えていく研究の足場が今できつつある。中学教師が出張授業をしたり、小学生が中学校に参観に来ることが連携ではなく、9年間共に考え、理解していくことが大切である。

高校になると芸術教科は選択となり、多くの生徒にとって造形活動のチャンスは中3までとなる。生涯学習を考えると9年間の造形活動は貴重である。そのうちの小6の図画工作から中1の美術の授業の変化をスムーズに越えさせるにはどうしたらよいのか。このことが教科における小中連携の課題である。

研究主題（題材）	モノを生み出す人の心 木から小刀でつくる ～ 町おこしグッズ（2学年）	領域	複 合
提 案 者	西東京市立田無第四中学校	木 原 美 恵	
研究の視点	・モノとの関わり ・材料や用具の特性を生かした表現		

題材設定の理由

人の心の有り様、もち様により、モノは大きく姿や用途を変え、見る人、使う人の印象も大きく変わる。本来、モノ（道具や材料）は、人類の文化を背景とし、それを使う生活に密着した学びを伴うものであった。しかし、現代社会においては、「生活体験」が乏しく、実生活における人の心とモノとの関係性が希薄となり、ややもすると、モノについて安易に考え、お金を払えばいつでも手に入ると思われている。しかも、大量生産の時代を反映して、創造されたものに宿る匠の技や心、価値といったところまでをくみ取ることは難しい。特に、道具としてのモノの一つである刃物は、本来の正しい使い方を学ぶ機会が乏しく、短絡的に人の心の闇をも映し出す凶器としてのイメージすらある。そこで、本題材では、扱う人の心や創造性によって道具（刃物）が便利なモノにもなること、同じモノでも工夫を加えることによって、素材・色・形を自在に変えられ、心豊かな生活を創り出せるモノに変容すること、さらにそれを使うことでモノづくりを楽しむことの喜びへと広げていきたい。

指導のねらい

- ・刃物が持つ意味や機能を理解し、その扱いを学ぶことで、「ものづくり」の喜びを引き出す。
- ・日本の伝統文化を生み出した「木」・「竹」という素材の性質を引き出し、制作を通してモノとの多様性に気付く。
- ・創造性を加えることで、モノに意味を与え遊び心あふれるものづくりの楽しさを味わう。

指導目標

- ・モノ（材料、道具）のもつ意味、性質を理解し、その魅力を感じ、モノに興味をもたせる。
- ・素材からどのような表現ができるかを多様に考え、各自のイメージを具体的な形に表すことができる。
- ・材料の特質をいかし、道具を正しく扱って、自分の思いを表すことができる。
- ・モノ・ものへの可能性を広げ、見方、感じ方を深めさせる。

学習の展開

導 入	<p>制作意欲を喚起する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・～町おこしグッズ（自分の街を活気づけ、多くの人にインパクトを与えるお土産品）～というテーマについて、それぞれの地域、観光地グッズについて意見を述べ合う。 ・『府中のシンボル＝けやき並木、大国魂神社』から『府中の森、守り像』という「鉢植え飾りグッズ」の制作への挑戦。 ・材料は、「木」・「竹」・「紙粘土」、道具は、「刃物」・「カッター」に限定し身の回りにある素朴なモノから、いかにブームを呼べるものを作り出せるか、意欲を喚起する。
-----	--

<p>展 開</p>	<p>モノ（道具や使う材料）を鑑賞、分析、発見、学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・素材を様々な視点から性質を探る ~印象、手触り、におい、思い... ・道具を " " ~イメージ、登場した背景、形... ・実際に、道具（刃物）を使って、材料（「木」「竹」）の違い・特質を学ぶ <p>* 刃物をもつ意味、機能とその扱い、素材の性質を引き出す手だてを加える。</p> <p>テーマを再確認しながら、発想・構想を練る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・紙面、及び、紙粘土で立体におこしてみる。 <p>途中段階の友のサンプル作品を鑑賞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お互いに刺激し合い、理解しながら、「木」と「竹」の合わさった『府中の森、守り像』という「鉢植え飾りグッズ」を制作。 ・必要に応じて、手軽な色ペンで作品に彩りを加える。
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の作品を発表し合い、お互いに作品を鑑賞し合う。 ・モノ（道具や使う材料）とかかわることを通して、学んだこと・感じたことを言語活動（ワークシート）を通してさらにしっかり理解する。



評 価

美術への関心・意欲・態度

- ・道具や素材というモノに関心を持ち、意欲的に制作しようとしている

発想や構想の能力

- ・豊かに発想して、独自のもの『府中の森、守り像』を構想することができる

創造的な技能

- ・道具の使い方をしっかり理解して、それぞれの素材を効果的に表現することができる

鑑賞の能力

- ・完成作品から想像力の豊かさを味わい、自分の意見や見方、感じ方を深めることができる



研究授業 6

研究主題(題材)	自分を取りまく世界「事象と自分の距離」 (2学年)	領域	表現
提案者	国分寺市立第五中学校 北澤昭俊		
研究の視点	・環境とのかかわり ・主体的な主題の決定		
<p>題材設定の理由 現在、膨大な量の情報の中で私達は生活している。その情報のほとんどはメディアの発達によりその内容の如何に関わらず同じように手軽に得ることができる。しかし、情報としては入手できても、内容は、それぞれ自分から様々な距離をもっている。対象と自分との距離は心的、物的の両面があると考え、今回は物的な距離という観点で分別し、抽象的な平面作品として表現する。普段、使用しない道具を使って自由に描くことで表現の楽しさを体験し、想像力を刺激するとともに、作品として作り上げる構成力、柔軟な視点を養うことができると考えた。</p> <p>指導のねらい 具象的な絵画表現を避け、様々な道具で作り出すマチエールのおもしろさを体験させる。 主題は意識した上で、色・マチエールで表現できるよう工夫させる。 自由に作られた表現の中から、トリミングすることで構成力を養う。</p> <p>学習の展開 生徒の活動 教師の活動・指導上の注意点</p>			
導入	<p>主題の確認、未決定の場合は主題を決定する。 今回の授業が単なる「絵の具遊び」ではないことを意識させ、各個人が選んだ主題と自分からの距離をカードに記入させ、画用紙の中心に主題をマジック・筆などでまず書かせることで、作業内容を確認し単なる絵の具遊びではないことを意識させる。 自分を取りまく様々な環境について再度意識させ、自分が何を選択するかを確認する 表現する際の条件を正確に伝える。 * 使用する道具・色材・画面の大きさ・表現方法 * 具体的なものは描かない。 筆は最初だけで、スポンジ・厚紙・ペインティングナイフを使用する。 * 最後に透明プラスチック板を当ててトリミングして作品として決定づける。 * 今回は時間的な制約もあること</p> <p>[評価の観点] ・自分で主題を選び、作品のキーになるものを用意しているか</p>		
展開	<p>作品のキーになるものを中心に添付(黒マジック、筆などで書く)し、その上から絵の具による自由表現をする。 机間巡視により適宜指示 * 偶然にしても、意図的に行ったとしても表現の効果の発見を大切にする。 * 「失敗」はないので思い切って大胆に制作する。 * 用意された道具を一度は使用してみる。</p> <p>評価の観点 ・のびのびと作業し、色彩、道具の使用方法を工夫して取り組んでいるか。 ・単なる絵の具遊びに終わっていないか。 ・表現のルールを理解しているか。</p>		

<p>展 開</p>	<p>絵の具による制作が終了した生徒から順次ドライヤーで画面を乾燥させる。 画面が完全に乾燥したことを確認した後、透明プラスチック板を使用してトリミング作業に入る。 キーになる部分がトリミング部分からはずれても作品としてのまとまりがあればよしとする。 作品を提出し、黒板に掲示する。 距離別に展示していく</p> <p>評価の観点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トリミングに際し、安易に決定せず様々な可能性を考え真剣に取り組んでいるか。
<p>まとめ</p>	<p>展示された自分たちの作品を見て意見発表をする。(自評及び自分が好きな作品を選んで印象に残ったポイントを発表) このような制作方法の作品が作品として成立するという点について説明する。(トリミング・オートマティズムの話を含めて) 自分との距離の意識と作品化について、全体的な評価を与える。</p>

その他 作品例など

今回はペインティングナイフ2種類、スポンジ、板目紙、画用紙を用意したが、その他にローラーなど使えそうな用具を様々用意できるとよかった。

評価にあたっての留意点

生徒作品については、色の選び方・色彩構成、表現の工夫、トリミングの仕方、については評価するが、主題との整合性についてはあえて問わない。また、個々の作品だけでなくモザイクのように組み合わせられた全体の印象についても生徒に感想を求めたい。



内容、形式は各市の研究内容に応じて、多少異なっております。

研究主題（題材）	「春の風景」（2学年）		領域	表現・鑑賞
提 案 者	武蔵村山市立武蔵村山第四小学校 武蔵村山市立武蔵村山第二中学校	高 須 賀 明 美 棟 方 篤 子		
研究の視点	・小学校と中学校の交流授業 ・鑑賞を通したコミュニケーション能力の育成			
題材設定の理由				
<p>4年生が水彩絵の具を用いて木を描いた作品を、中学生が鑑賞し、相互に交流を図る実践である。小学生は、自分が感動したこと、発見したことなどをどのような方法で表すのかを考え、自分なりに表現し楽しむ力を育てる。また自分なりの考えをまとめて絵に表し、さらに友達の作品を鑑賞したり中学生からのアドバイスを聞いたりして、お互いの考えや感じとったことを意見交換することで思いを言葉に表す力を育てる。中学生は、身近な作品を鑑賞し、言語化することにより、表現についての理解を深めることができる。</p> <p>小中連携の視点として、中学校の美術科教員が小学校4年生の図工授業にT2として指導にあたる。小学生の風景画を中学生が鑑賞して小学生に向けてアドバイスをおくり、小学生と中学生の感じ方や考え方、表現の仕方をお互いに知る良い機会とする。小学校の図画工作科の教員と中学校の美術科が場面により指導を分担して行う。</p>				
指導のねらい				
<ul style="list-style-type: none"> ・春の木を見て自分が感動したことを絵に表し、相手に伝えることを楽しもうとする（関心・意欲・態度） ・感動したことをどのような方法で表すか構想を練る（発想や構想の能力） ・表したいことが相手に伝わるよう表現方法や描画方法を工夫する（創造的な技能） ・実生活の中で伝え合うことの喜びを味わい互いの表現のよさを感じとる（鑑賞の能力） <u>本時授業</u> 				
学習の展開				
	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価	小・中連携の工夫
導 入 (10分)	友達の作品をゆっくり見て、よさを味わう。			
	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の作品をゆっくり見てよさを味わう。 ・友達がどんな工夫をしているか気付く。 ・自分はどんな工夫をしたか再確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> どんなことに気を付けて鑑賞すればいいのか示す（T1） お互いを認め合う雰囲気の中で鑑賞活動が行われるようにする。 感じたことのメモを取らせる。（T1・T2） 友達の考えや表現の仕方に関心をもつ<関心・意欲・態度> 		<ul style="list-style-type: none"> ・小学校（T1）、中学校（T2）で協力し、児童の個別指導にあたる。
展 開 (25分)	お互いの作品を鑑賞して、よさや印象に残ったところを書いてみよう。			
	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の作品を見てよいと思ったこと、気付いたこと、参考になったことなどを、メモをもとにして書く。 ・大事な言葉を書き出し、気持ちが伝わるように文を構成する。 	<ul style="list-style-type: none"> メモを見ながら自分の気持ちが伝わる言葉を探させる。（T1、T2） ・大事な言葉を書き出し、気持ちが伝わるように文を構成させる。 ・言葉から受ける雰囲気も、気持ちを伝える上で大事なことを伝える。 黒板や掲示板を利用し、全作品を掲示して間近で鑑賞できるようにする。 台紙などで映えるように工夫する。 自分が感じとったことを確認している<鑑賞の能力> 		<ul style="list-style-type: none"> ・小学校（T1）、中学校（T2）で協力し、児童の個別指導にあたる。
	お互いの作品を鑑賞して、よさや印象に残ったところを書いてみよう。			
	<ul style="list-style-type: none"> ・発表することで自分の考えを再確認する。 ・自分だけでは気付かなかった友達の作品のよさに気付く。 ・友達の言葉の表現にも関心をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> 気持ちが具体的に伝わる表現力を拾う。（T1） ・どんな言葉が印象に残るか、心のもった言葉中心になる言葉などに気付かせる。 		<ul style="list-style-type: none"> ・中学校（T2）中学の観点からのアドバイスを行う。

お互いの作品のよさや印象に残ったところを話し合おう。

まとめ (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生からのアドバイスを聞く。 ・いろいろな表現方法に気付く。 	中学生が作品を鑑賞して感じたこと、アドバイス、その他中学生の活動風景などを紹介する。(T2)	<ul style="list-style-type: none"> ・事前を書いてもらった中学生のメモを紹介する。
--------------	---	--	---

研究のまとめ



武蔵村山二中と隣接する武蔵村山四小は22年度小中一貫校へ向けて交流授業を研究している。指導案は6月18日(水)に行われた小中連携授業実践交流会の報告である。当初は小学生と中学生と一緒に鑑賞の授業を行う予定であったが、運動会、中学校の中間テスト間近という事で日程調整が難しく、小学生の鑑賞の授業に中学生からのアドバイスというかたちで参加をする形式となった。

事前指導として、中学生(2年1組21名)が事前に小学生の絵を鑑賞し、作品に対する感想、アドバイス、励ましの言葉をカードにまとめた。小学生の作品を授業の中で鑑賞する事が生徒にとって新鮮だったようで、熱心に鑑賞カードを書いていた。自分や友達の弟妹がいた事もあり、授業に参加する児童に親しみが感じられることから、作品について

も興味をもちやすいという利点があったようだ。上級生という視点から感想やアドバイスを書いている例が多かった。また、四小の児童を知るため中学校美術教員が図画工作の授業に参加した。クラスの雰囲気、配慮が必要な児童を知ることができ、児童たちにも顔を知ってもらう良い機会となった。

Photo: 中学生鑑賞授業の様子・武蔵村山二中美術室にて

当日の授業では、小学生が中学校の美術室にはじめて入り緊張した面持ちで鑑賞の授業を行った。窓際に全員の作品を並べ、自分の隣の作品に対してよさや印象に残ったことを書き留めていった。自分の作品との違い(表現のよさ、工夫、色、形など)など、感じたことを言葉に書いてみることは、作品の再発見の場となり、表現活動が苦手な児童にとっても言語に置き換えてみることで、気持ちを鑑賞というかたちで表現することができ、お互いをさらに深く知り合うきっかけの場となると考えられる。今回の授業では、まとめの時期が適切だった事、表現活動が好きな児童の多い落ち着いたクラスでの授業で、集中して授業に取り組むことができた。友達の作品に対する意見も、ほとんどの児童が積極的に発表することができた。

まとめの時間には、サプライズとして中学生からの鑑賞カードを発表した。上級生からのアドバイスを聞きたくてさらに集中して聞くことができた。その他、中学生の作品を紹介し45分という限られた時間ではあったが、自分と友達、さらに上級生という関係から、図画工作の授業の枠を少し越え先につながる授業が展開できたのではないかと思う。

今後の課題としては、いかに小学生と中学生が有意義に交流授業を行っていきけるか、カリキュラム自体を見直し、検討していく必要がある。また、早い段階での準備が必要なので小学校と連絡を密にして、よりよい交流授業を作れるように研究を行っていきたい。



Photo: 小学生鑑賞授業の様子・武蔵村山二中美術室にて

研究主題（題材）	私の好きなシャツ＝鑑賞と色、模様付けの提案＝（2学年）	領域	鑑賞
提案者	狛江市立狛江第一中学校 石黒しおり		
研究の視点	・批評力やコミュニケーションの育成から見た鑑賞の指導 ・構想の能力の育成		

題材設定の理由

2ヶ月かけて制作してきた紙粘土のYシャツ作品に、色や模様付けを行う題材である。普段から生徒同士、お互いよくコミュニケーションをとっているようで、実際には深い交流ではない場合も多いように見受けられる。また、美術の授業内で生徒同士、お互いの作品をよく見合っているかという、こちらの予想外に、見ていないのが現実であると思う。

作品としてはまだ、途中段階ではある。しかし白い作品の段階で、ひとりひとりの作品を本人のコメントを聞きながら一点一点鑑賞し、また質問をしたり、色についての提案をしたりといった会話を持たせたい。そして、さまざまなまわりの意見も参考にしながら、今後作品の色や模様付けに前向きに取り組んでいくきっかけになると考え、途中段階での鑑賞授業を設定した。

指導のねらい

この課題は、紙粘土による立体の課題であっても、導入時に、描写力を高めるために二通りのたたみ方をしたシャツのスケッチからはじめた。使用する紙粘土は扱い易く、かなり細かい表現も可能である。紙粘土でシャツの形まで制作した時点で、本時の色のアドバイスや鑑賞を行うことでコミュニケーション能力（人間関係形成能力）や次の色や模様付けへの意思決定能力の育成をも図れるようにした。

学習の展開

	学習活動	指導上の留意点	学習活動の観点と評価方法
導入	今までの振り返りと、今日の流れについて説明する。	今日の目標・自分の主張をきちんとしよう、お互いのアドバイスに耳を傾けよう。	紙粘土での制作を振り返り、自分の作品を見つめながら参加しているか。
展開	班内での鑑賞（班長司会） 一人ずつ自分の作品紹介 班員は必ず作品に対する質問と色や模様のアドバイスをする。	本人の解説をよく聞いて参加するとともに、色や形のアドバイスをよく聞いて参加する。 色や模様については、答えは一つではない。自分の考えも大切に、また他の意見もヒントになる。	自分の作品と向き合って自分の主張を述べられたか。班員の質問に答えたり、質問したり、また、色や模様について他の人にそれぞれアドバイスをすることができたか。班員の作品をよく鑑賞し、次の色や模様付けの参考にできたか。
	教師も各班を回って発表中の生徒に質問する。	あまり多く語らない生徒にも質問を重ねることで、言葉を引き出す。	周りとのコミュニケーションがとれているか。
	班代表の作品の鑑賞（学年委員司会） 「おほめ隊」によるこの作品のここがいいというコメント 班員から質問、アドバイス	全作品のどんな点を魅力的に思うのか、どんなところをどう工夫して面白みを出しているのかを考えながら生徒の発表を聞くようにする。	自分の作品と照らし合わせて、よい点は取り入れられるようにする。 飾ったときに面白みのある作品とは、どういうものを指すのかなど、考えながら鑑賞できたか。

まとめ
今日の鑑賞会を通して感じた事を個々に書かせる。
班長がまとめて各班発表させる。
作品の鑑賞を通してそれぞれどのような感想を持つのか、最後に共有して終わる。



（評価）

自分が表現したい意図を自ら決め、その考えを発表できたか。
独自の発想で形、色、模様についての計画がなされているか。
他の生徒へのアドバイスができたか。
飾ることを想定して面白さや見る人の印象に残るよさが表現されているか。

研究主題（題材）	美術館鑑賞を通しての新聞づくり（1・2学年）	領域	鑑賞・表現
提案者	小金井市立小金井第一中学校 澁谷 寿美恵		
研究の視点	・美術館との連携 ・批評力やコミュニケーション能力の育成の視点からみた鑑賞指導		

題材設定の理由

普段の授業の中では、教科書や資料集などの写真を利用して鑑賞の授業を行っているが、実際の作品を鑑賞したときに受ける印象とはかけ離れたものになってしまう。夏休みを利用して、生徒自ら美術館へ足を運び、本物の作品を鑑賞し、実物から伝わるものを実感してほしいと考え設定した。また、壁新聞の形式でレポート制作をし、発表することで、作品や作家について調べ、考え、まとめることで批評する力を伸ばすことにつながると考えた。さらに、他者にいかに自分の考えを伝えるかということに取り組むとともに、他のレポートを読み、お互いの感じ方を交流させることで、コミュニケーション能力を高めていくことにもつながると考え設定した。

指導のねらい

- ・美術館での作品鑑賞を通し、そのよさや美しさを感じ取り、美術を愛好していこうという気持ちを育てる。
- ・作品や作家について詳しく調べるとともに、自分なりの感じ方、考え方を表現できるようになる。
- ・見やすく、わかりやすいレポートになるように、レイアウト、レタリング、タイトルなどの工夫ができるようになる

学習の展開

	学習活動の流れ	指導上の留意点
導入 50分	<ul style="list-style-type: none"> ・夏休みの美術館新聞の課題についての説明を受ける。 ・美術館新聞の説明プリントを読む。 ・美術館での鑑賞マナーについて学習する。 ・夏休みの美術館ガイドプリントを見る。 ・美術館新聞の用紙の確認。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題について説明する。 美術館新聞作成の仕方についての説明 ・過去の生徒作品を何点か見せイメージをつかませる。 ・美術館での作品鑑賞を通し、興味を持った作品や作家について詳しく調べることを伝える。調べ方は、現地で調べる他、後日、図書館、インターネットなどを使い調べていくことを理解させる。 ・作品や作家に対する自分なりの感じ方、考え方を記事に織り込んでいくことを知らせる。 ・レイアウトを考え、イラストや図などを入れて見る人にとってわかりやすく、興味を引くデザインの工夫をする。 美術館でのマナーについての説明 ・静かに見学をする。 ・大きな荷物は持ち込まない。 ・インクを使ったペンなどは使用せず、鉛筆を使ってメモなどをとる。 ・撮影は必ず許可された場所のみで行う。（基本的には撮影ができない場合が多い） 美術館の情報について ・東京の主な美術館についての情報をプリントにして配布し説明する。プリントにある美術館以外でも、地方などの美術館、博物館なども対象であることを伝える。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の流れ ・美術館や博物館に行き作品鑑賞をする。 ・美術館新聞を制作する。 	
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・2学期に美術館新聞を掲示し、お互いに鑑賞しあう。 ・他の人の美術館新聞を見ての感想を書く。 	生徒の感想を美術科通信に掲載しいろいろな人の感じ方、考え方を知り、美術に対する興味や関心を高めていく。

評価

美術への関心・意欲・態度：美術作品を鑑賞しそのよさや美しさを感じ取り美術を愛好していこうとする。

発想や構想の能力：伝えたい内容を分かりやすく伝えるために、形や色彩などの効果を生かして分かりやすさや美しさなどを考えて表現の構想を練る。

創造的な技能：自分の表現意図に合う方法を工夫するなどして創造的に表現する。

鑑賞の能力：造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などを感じ取る。

研究主題（題材）	美術文化の理解を深める鑑賞（1学年）	領域	鑑賞
提案者	国立市立国立第三中学校 宇野庄治		
研究の視点	・伝統文化、美術文化の継承や創造		

（題材設定の理由）

新学習指導要領では、第一学年の鑑賞の目標を次のように定めている。「自然の造形や美術作品などについての基礎的な見方を広げ、美術文化に対する関心を高め、よさや美しさなどを味わう鑑賞の能力を育てる。」さらに、第一学年の鑑賞の内容を、「身近な地域や日本及び諸外国の美術の文化遺産などを鑑賞し、そのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化に対する関心を高めること。」と定めている。

上記の目標と内容に基づき、本題材は、日本と諸外国の美術作品に対する感想の交流や調べ学習、発表活動を通して美術文化についての理解を深め、他者との交流を図ることによりコミュニケーション能力を培おうとするものである。

（指導のねらい）

発表用に取り上げたい作品を自分で決めることにより、なぜその作品を選んだのか、作品のよさや美しさに気付かせる。また、他者の感想や意見をとり入れることにより、自分の見方だけではなく、他者の見方にも気付き、鑑賞を深めていく方法を学ぶことがねらいである。同時に、自由に感じることに加え、話し合いの中で感じ方、見方、考え方を磨き合う活動を取り入れることにより、コミュニケーション能力を培うこともねらいとした。

（学習の展開）

時間	学習活動	学習活動における評価規準			
		美術への関心・意欲・態度		鑑賞の能力	
1 5	<ul style="list-style-type: none"> ・美術史のテキストで紹介されている多くの作品を鑑賞する。 ・エジプトのピラミッドのビデオを見る。 ・エジプトの古代文字、ヒエログリフで自分の名前を書く。 ・プリント学習をパソコン室のネットで調べる。 ・時代ごとの美術作品をビデオで鑑賞し、各時代の特色をとらえる。 ・調べた中から、自分がさらに調べ、発表したい作品を決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・美術作品に興味・関心を持ち、鑑賞し学ぶことを楽しんでいる。 ・提示した作品や自分が選んだ美術作品について、ネットを利用して調べ、美術文化に対する関心を高め理解する。 {学習プリント・発言・観察}		<ul style="list-style-type: none"> ・美術作品を鑑賞し、感性や想像力を働かせて、多様な表現や美しさに気付く。 ・美術作品を鑑賞し、感性や想像力を働かせて、そのよさや美しさなどを感じとる。 {学習プリント・発言・観察}	
		【Aの判断の例】 意欲的に楽しく作品を鑑賞し、感じたことを積極的に発言したり記述したりする。	【Cへの支援】 作品の特徴や違いについて気付く着目点を与える。	【Aの判断の例】 作品のよさや美しさを、自由な見方で多数見つけ、記述し伝えられる。	【Cへの支援】 興味を持った作品について、その理由を具体的に挙げさせる。
6 8	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で決めた作品についてさらに詳しく調べる。 *調べる内容は全員同じ内容とする。 ・6人一組の班を作り、班の中で自分が調べた内容を発表する。 ・他者の発表を聴き、感想や質問を述べ、意見交換する。 *発表の内容を書き取るプリントを準備しておく。 ・自分で調べたことと、他者の意見から気づいた点や、色々な見方や感じ方がある事をプリントにまとめる。 ・画用紙にまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で選んだ作品について、ネットや資料を利用して調べ、理解しようとする。 ・他者の考え方に関心を持ち、いろいろな見方や感じ方・発想の仕方などに気付き、認め合おうとする。 		<ul style="list-style-type: none"> ・自分で選んだ作品について、造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫など、感じたことや調べたことを通して理解を深める。 ・作品に対する自分の価値意識を大切に、他者の意見をくみ取りながら批評しあうなどして、美意識を高め幅広く味わう。 	
		【Aの判断の例】 作品の資料を積極的に集め、深く調べようとする。 人によって様々な受け止め方による意見があることを認め、まとめようとする。	【Cへの支援】 調べ方についての具体的な視点を与える。 発表から新たに分かったことを書かせる。	【Aの判断の例】 作者の心情や意図を感じとり伝えられる。 他者の発表を意欲的に聞き、多様な見方を積極的に認めることができる。	【Cへの支援】 興味をもった作品について、最も印象に残る部分を書かせる。 他者の発表から新たに分かったことなどを具体的に挙げさせる。

（題材の評価規準）

美術への関心・意欲・態度 美術作品の鑑賞に親しみ、意欲的によさや美しさなどを学び、作品などに対する思いや考えを説明し合うなどして、対象の見方を広げる。

鑑賞の能力 作者の心情や意図と表現の工夫、その良さや美しさなどを感じとり、美術に対する関心を高める。

研究主題(題材)	漆工螺鈿印章箱 (3学年)	領域	表現(工芸)
提案者	小平市立小平第四中学校 杉山 充		
研究の視点	・伝統と文化の理解 ・道具や用具の特性を考慮した表現		

題材設定の理由

日本人のほとんどは Japan という英語を知っているだろうが、小文字で始まる japan が漆器や漆のことを指しているのを果たして知っているだろうか？イェズ会によって南蛮漆器が広く西欧諸国にもたらされた時、japan といえば他のアジア諸国産の漆器ではない日本産の平蒔絵や螺鈿の施された漆器を指していた。我が国の風土は工芸用として最良質の漆を産出し、その漆を用いた漆工技術や意匠は間違いなく世界一である。また、「かぶれる(熱中する)」や「恥の上塗り」「重箱の隅をつつく」など漆芸にちなんだ言い回しもあり、漆が日本人の生活に深く根付いていたことを窺い知ることができる。これらのバックグラウンドをしっかりと認識し漆芸を学習することは、日本人としてのアイデンティティの確立につながり、広くは国際社会の中での日本の立場や役割について考えることへと発展していく。

指導のねらい

1. 青貝技法による漆芸螺鈿技法を体験させ、漆を塗るための素地の整え方、貝の切り出し方、貼り方、中塗り、上塗り研ぎ、呂色磨き、箔押しなどを体験を通して習得させる。
2. 用途を考え螺鈿印章箱にふさわしい意匠を工夫する。
3. 金箔、銀箔を扱い、箔押しを体験させる。

学習の展開

導入	漆芸や螺鈿についてその歴史を学ぶ。 作業進度票を用意する。	螺鈿技法についてのプリントを用意。 図書資料をそろえる。
展開	<p>貝を切り出す時の制約を理解しながら印章箱にふさわしい意匠を考え、原寸大の大きさで画用紙に描く。 印章箱の素地を整える。印章箱の内側に漆を塗る。 下絵が完成したら、使用する貝に下絵を写していく。 同じ大きさの幾何学模様は背中合わせにして、無駄のないようにとっていく。 貝にたっぷり水を含ませカッターで切り出していく。 切った貝は分類して小さなビニール袋に保存しておく。 箱に貝を貼り付ける前に、補助線を書き入れる。 面相筆とピンセットを使いながら貝を貼っていく。 すべて貼り終わったら平らなものに押し付けて平面性を確保する。 下塗りと下塗り研ぎ 彫刻刀などを使って貝の表面に付着した漆をはがしていく。 中塗りと中塗り研ぎ 上塗りと上塗り研ぎ 2,000 番で丁寧に研ぐ。</p> 	<p>出来上がりのイメージを分かりやすくするために、貝の部分は白、バックは黒で表現させる。 導管がどこを通っているか気付かせそこを中心に素地を整える。 漆が衣服に付かないように注意する。 漆のこし方、刷毛の使い方、ゴミが混入したときの処理方法を教える。気温の状態によって漆の濃度を変える必要があるが、経験が必要なので教師が調合する。 貝にはそりがあり、凸面が上になるように下絵を写させる。 貝を貼るための漆を硬めに調合する。糊の漆が少量表面にはみ出し付着しても取り除くことができることを知らせる。 研ぎが丁寧でない場合は刷毛目が残りにやすくなることを伝える。 貝の上の漆をはがすために彫刻刀を使う場合、中塗り上塗りとなるにつれて、貝と漆との段差が少なくなりだんだんと難しくなることを伝える。 研ぎ破る生徒も出てくるので、漆の厚さや手加減を覚えさせる。1000 番程度の耐水ペーパーと砥石を用意する。 貝の表面と漆の塗面が同一平面になるように研がせる。</p>
まとめ	<p>蠟色磨き 極細のコンパウンドを使い、丁寧に磨いていく。 油を少量付け和紙で磨く。 チタニウム粉末で、油を取り除くように磨く。 作業全体を振り返って感想文を書く。</p>	<p>これまでの作業が完全でない場合、貝が欠けたり、消失する場合もあるので、よく観察しながら、手を止めるところを決定させる。 コンパウンドでも研ぎ破るので注意する。</p>

- 評価**
- ・常に諸感覚を働かし、興味や関心、好奇心によって意欲を高めながら学習を進めることができたか。
 - ・よりよい意匠のために、次元の違うもの同士を結びつける工夫ができたか。
 - ・作業に見通しをもち、その工程を能率化する工夫がされたか。
 - ・各工程において、過去の名作との比較や自己の意匠と向き合いながら制作を進めることができたか。

研究主題(題材)	学校に水族館を作ろう～空想の魚たちをペーパークラフトで(1 学年)	領域	表現(デザイン)
提 案 者	清瀬市立清瀬第五中学校 別 府 世 通		
研究の視点	・小・中学校の連携 ・モノとのかかわり		

題材設定の理由

紙は、表現の材料として幼少時から小学校にかけて最も多く扱われているので、生徒にとって親しみやすい素材のひとつである。切る、折る、丸める、貼る、ねじる等の加工が容易で自在に扱えるので、多様な表現を楽しむことができる。小学校から親しんできた技法と、さらに紙を立体(半立体)にする技法を加えて、紙ならではの表現と工夫を楽しみ、創造の喜びを味わうためにこの教材を設定した。

指導のねらい

- ・紙の加工方法を工夫し、それぞれの表現意図にそった効果的な表現ができる。
- ・課題に対して自由に発想し、それを形にするための構想を練る過程を経ることで発想、構想力をつける。
- ・「学校に水族館を作る」という取り組みを通して、生徒たち自身の場所としての学校にさらに親しみや愛着をもつ。

評価規準

観 点	ア 関心・意欲・態度	イ 発想・構想の能力	ウ 創造的な技能	エ 鑑賞の能力
題材の 評価規準	・自分なりの発想を生かした表現を楽しもうとする。	・課題に対するイメージを広げ、表現を工夫する。	・材料の特性を生かしながらイメージに近づける工夫をして制作する。	・表現の工夫やよさを感じ取り、対象の見方や感じ方を広げる。
学習活動に即した 具体的な評価 規準	学校環境に自分たちが関わっていることを自覚し、意欲的に話し合いに参加しているか。 紙の表現に興味や関心をもって取り組んでいるか。	楽しみながら発想しイメージを広げているか。 課題に対してイメージをもち、考えているか。	自由に発想したことをスケッチに表しているか。 紙を使った表現を工夫し、効果的に生かそうとしているか。	友だちの工夫を見て自分の制作に生かそうとする。 友だちの作品から、表現の工夫やよさを感じ取っているか。

指導計画 10時間

次	時	ね ら い	学 習 活 動	評 価 規 準
一	1	学校環境を考え、学校水族館に関心を向ける。 自由に空想することの楽しさを味わう。	・学校にある水槽を拡大して、学校に水族館を作ること を想像してグループで話し合う。(学校のどこに設置する か。どんな魚を入れてみたいか。) ・プリント、資料など参考にどんな魚がいたら楽しいか、 スケッチする。	ア イ ウ
二	8	紙で立体表現するための技法を学ぶ。 紙の立体表現を工夫し、イメージを形にしていく。	・円錐、半球、太鼓貼りなどいくつか作ってみる。 ・空想の魚という課題に対するイメージをふくらませ、 紙で表現する工夫とあわせて制作する。	ア イ ウ エ
三	1	友だちの作品を鑑賞し、多様な表現を味わい、それぞれの表現の工夫を見い出す。	・青い模造紙をつなげて水槽に見立て、作品を置いて、 学校水族館を完成し、鑑賞する。 ・感想カードに記入する。	エ

学習の展開 2時間目

	学習活動	指導内容 と支援	評価
導入	<ul style="list-style-type: none"> 友だちのスケッチを鑑賞する。 活動内容を知る。 紙で箱作り、半円、円錐などいくつか演習する。 	<p>前回のスケッチからいくつか紹介し、学校水族館に対する興味や関心を喚起する。</p> <p>参考作品を示して、紙で学校水族館の魚を作ることを説明する。</p> <p>紙を立体に表現する技法を説明する。道具の扱い等、ぎこちない生徒には個別指導する。</p>	<p>エ 友だちの発想に興味、関心をもって鑑賞する。 (観察)</p> <p>イ 紙の性質や表現技法を理解しているか。 (演習作品)</p> <p>ア 興味、関心をもって楽しみながら作っているか。 (観察)</p>
展開	<ul style="list-style-type: none"> 自分のイメージと紙の表現方法を考えて空想の魚を制作する。 	<p>紙による立体表現の工夫を説明する。 (形の単純化、強調化、編み方など)</p> <p>前回のスケッチをもとに制作してもよいし、紙の表現から発想して制作してもよいことを伝える。</p> <p>工夫している生徒の作品をその都度紹介し、お互いに参考に促す。</p>	<p>ア 課題に向けてイメージをもとうとしているか。 (観察)</p> <p>ウ 新たに自分で紙の加工を考えようとしているか。 (観察、作品)</p> <p>イ 紙の加工を工夫して、効果的に表そうとしているか。 (観察、作品)</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 本時の活動を振り返り、次回の制作の見通しを立てる。 道具を片づける。 	<p>制作カードを配布し、見通しを立てて活動できるようにする。</p> <p>見通しのつかない生徒には、本時の振り返りから、次回の活動を推測させる。</p>	<p>ア 制作の順序などを考えながら見通しをもって取り組むことができるか。 (観察、制作カード)</p>



まとめ

空想の魚というイメージと、紙を立体にする方法を理解して制作することがこの授業の柱である。イメージが乏しかったり、紙の性質や加工方法が理解されないと、表現が貧弱になってしまう。ここでは頭の中でイメージを考えることの他に、紙をいろいろ加工しているうちにアイデアが出てくるということも取り入れていこうと思う。また、紙の種類や色数も多様なほうが表現の幅も広がるだろう。素材と向き合い、動きと思考を結びつけて主体的に創造することを身に付けさせたい。

完成後、青い背景を水槽に見立てて学年の作品を並べて学校水族館という形で展示し、全体でひとつの作品という形で鑑賞することで、他者の作品や思いを尊重する気持ちも育てたい。

研究主題（題材）	自然素材にいのちを吹き込もう（2学年）	領域	表現（彫刻）
提案者	東久留米市立久留米中学校 廣瀬 正徳		
研究の視点	・モノとのかかわり ・材料から発想する新たな表現方法の工夫		

題材設定の理由

今日、豊かな自然が少なくなり、生徒が自然や自然素材と触れあうことが少なくなってきている。様々なものがあふれる中で生活しているためか、造形の素材としても人工的なものを使うことが多く見られる。また、美術の授業でも新しい素材を使うことが多くなってきている。現勤務校は、校舎の裏に黒目川が流れ、多くの生徒たちは、黒目川沿いを毎日通学し、緑や水に囲まれたさわやかな環境である。生徒たちは、自然を十分に感じていると思うが、自然の中から素材を探してきて使うことは少ない。自然が豊富にあっても生徒たちの遊びはゲーム機中心であったり、習い事などで忙しかったりし、生徒たちは自然や自然素材と関わるのが少なくなっている。そこで、この題材では、周りにあるにもかかわらず、見過ごしてしまっている自然素材に目を向けさせたいと考える。

自然素材の中で育まれてきたものは、形や色に派手さはないが、素朴な感じがある。そんな暖かみのある素材とよくかかわらせ、自然の中で育まれてきたものの様々な材質、形、模様などからよさや美しさ、雰囲気などを感じ取らせたい。そして、それらを発想のきっかけとしたい。

また、自然素材の加工には、中学生でも手応えがあると思われる。切ったり、削ったり、接着したりと多少の抵抗を感じながらつくっていくことによって、自らの手を使って表現するという実感を味わうこともできると思う。

いま、中学校美術科として生徒たちの人間力の向上を目指していく中で、「美術を愛好する心情」「感性と創造性」「豊かな情操」をどのように育成していくのか、今回の大会のキーワードである「かかわり（つながり）」から「モノとのかかわり」という視点で本題材を設定した。

指導のねらい

- (1) 材料のよさや特徴などを生かし、工夫して表現することに関心をもつ。 ……(関心・意欲・態度)
- (2) 集めてきた材料をもとに自分の表したいことを思いつき、創造力を働かせて表したいことを構想する。 ……(発想や構想の能力)
- (3) 自分の表したいことに合わせて、材料のよさや特徴、材料の形の組み合わせなど表現方法を工夫する。 ……(創造的な技能)
- (4) 自分や友だちの表現のイメージや作品のよさなどを鑑賞し、いろいろな見方や感じ方があることを知り、それぞれのよさに共感する。 ……(鑑賞の能力)

指導計画（全10時間）

第一次 自然素材の収集

第二次 見つけてきた自然素材から材料を手に取りつくりたいもののイメージを膨らませる。

第三次 つくりたいもののイメージを明確にし、材料の生かし方を考えたり、材料を組み合わせたりしながら、表現する。

第四次 自分の表したかったことや伝えたかったことを学習カードに書いたり、互いの作品を見合って互いのよさを見つけたりする。

学習の展開（10時間）

	学習活動	教師の支援
第一次 (1時間)	「黒目川から自然の中で生まれたモノを探してこよう。どんな形のものが見つかるだろうか」という提案を聞き、材料を収集する。	・指導者が生徒が興味をもたせるよう自然素材をあらかじめ収集しておく。 ・いろいろなものに気付くことができるように、生徒が見つけた面白い形などをその場で紹介する。
第二次 (2時間)	見つけてきた自然素材にいのちを吹き込み、自分だけの形に変身させようという提案を聞き、材料を手取るなどして、つくりたいもののイメージをふくらませる。 ・材料のよさや特徴などを生かし、創造力を働かせて、様々な視点からイメージを持つ。	・「いろいろな方向から材料を見てみよう」「指や手のひらでよくさわってみよう」「どんな印象をもつかな」「集めたものから並べたり、束ねたりしてみよう」などおもしろい形、色、質感などに気づくことができるように言葉かけをする。 ・「～のように見えるね、どんな感じがするか、～も考えてみよう」など様々な視点からイメージがもてるように言葉かけをする。

	<ul style="list-style-type: none"> ・表したいことのイメージを書きとめたり、スケッチしてみたりしながら、表したいことのイメージをふくらませる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どのようなイメージなのかたずねたりして、表現にいかせるようにする。
<p>第三次 (6時間)</p>	<p>つくりたいもののイメージを明確にし、材料の生かし方を考えたり、材料を組み合わせたりしながら工夫し表現する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな方法を試してみる ・各自で持ってきた材料なども付け加え制作する。 ・つくりながら膨らんできたり、新たに思いついたイメージなども表現に生かすようにする。 ・関心をもって友だちの作品などを見たり、互いのイメージなどを話し合ったりして、自分の表現に生かすようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の表したいイメージがもっとよく表れるように工夫したり、今までつくりながら膨らんできたことや、新しく思いついたことを表現にいかしていくようにうながす。 ・どのようなイメージなのかたずねるなど、表現に生かせるように言葉かけをする。 ・新たに思いついたり膨らんだイメージなどを必要によってはメモさせる。 ・つまづいている生徒とはよく話し合い、イメージを整理したり、表現を見直したりできるように支援する。 ・友だち同士で活動や作品を見て互いのイメージの交流ができるようにうながす。 
<p>第四次 (1時間)</p>	<p>自分の表したかったことや伝えたいことを学習記録カードに書いたり、互いの作品を見合って互いのよさを見つけたりする。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・あらためて自分の表現を確認して、学習記録カードに記入させ、友だち同士の交流ができるようにする。 ・それぞれの表現のイメージや作品のよさなどいろいろな見方、感じ方があることを感じられるようにする。 

指導上の留意点

自然素材は多義的であり、他のものにはない造形素材としてすぐれた特性をもっている。自然素材と触れあう場面が少なくなってきた生徒に、その素材と触れあうことで、その柔らかさ、あたたかさ、手触り、香りなどを総合的に体験することによって、その自然の形や美しさ、おもしろさを気づかせることはとても大切なことである。そのためにも、自然素材を準備することに労を惜しまず、生徒一人ひとりが自然素材と向き合い、深く感じ取る場面や時間をしっかり設定するよう留意したい。今日、自然環境の悪化が叫ばれている。21世紀を生きていく子どもたちのためにも、こうした状況を軽視せず、造形活動を通して子どもたちに自然を見つめ直す取り組みを進めていくことが重要であると考えられる。

研究主題（題材）	「箱から飛び出す音と形 ～想像を形に～」 （1学年）	領域	表現（絵・彫刻）
提案者	立川市立立川第五中学校 中村 三里		
研究の視点	・主題の創造 ・発想した形を現す練習		

題材設定の理由

現代の中学生の生活は、視覚的な情報（テレビやネット、マンガ雑誌など）で溢れている。その反面、自ら絵を描いたり、素材とかかわりながら形を作ったりする経験は不足しているように感じる。そのため、生活の中で目に触れる「かわいい形」や「格好いい形」には敏感でありながら、自らイメージした形と自らの手が生み出す稚拙な形とのギャップを感じているように思う。その結果、表現することに対して「下手だから恥ずかしい」「面倒くさい」等の感想をもつ生徒が多いように感じる。

そこで、簡単なテーマに短時間で取り組ませるウォーミングアップ的な題材を積み重ねていくことが、物作り経験が不足している生徒たちにとって有用ではないかと考えた。イメージした形を手で思うままに表現する練習を通して本題材を設定した。

指導のねらい

選んだ音（擬音）に合わせて、その音らしい形を発想させる。

【発想構想の能力】

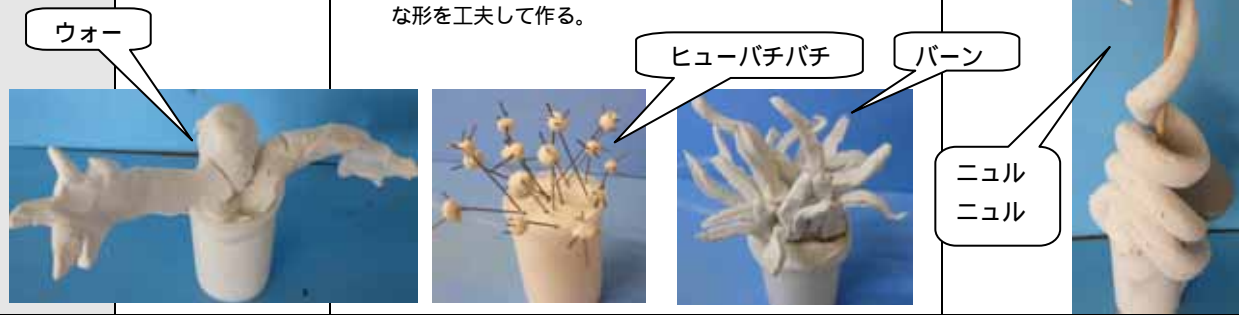
形をイメージしながら、意図に応じて紙粘土やへら等の生かし方を考え、創意工夫して表現させる。【創造的な技能】

自分の作品や友達の作品を鑑賞しながら、そのよさや発想の豊かさを感じ取らせる。【鑑賞の能力】

学習の展開

彫刻に表すな題材の前に、本題材をウォーミングアップとして設定した。

展開	ねらい	生徒の活動 四角内は教師の言葉かけ	指導の留意点
導入	主題を理解させ、音と形を発想させ、スケッチさせる。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> 小さな入れ物（フィルムケース）の中から、何かが飛び出します。どんな音を出して出てくるでしょう？どんな形が出てくるでしょう？ </div> <ul style="list-style-type: none"> フィルムケースを観察しながら「飛び出す感じ」を想像する。 想像した形と音をアイデアスケッチする。 	<ul style="list-style-type: none"> フィルムケース アイデアスケッチ紙説明前に二つを配布 作業が進まない生徒のために、音の例を黒板に板書する。
展開	想像した「飛び出す感じ」を紙粘土で表現させる。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> 紙粘土を手になじませよう </div> <ul style="list-style-type: none"> 紙粘土を手の上で丸めたり、伸ばしたり、ちぎったりしながら扱いに慣れる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> 発想した形を紙粘土で表そう </div> <ul style="list-style-type: none"> フィルムケースの中に粘土を詰める。 飛び出す感じをイメージしながら、その感じが伝わるような形を工夫して作る。 	<ul style="list-style-type: none"> 軽量紙粘土（1袋を4人で使用する。）
まとめ	自分の作品を振り返らせ、友達の作品のよいところを探すようにする。	<ul style="list-style-type: none"> 全員の作品をひとまとめにし、それぞれの工夫や面白さを感じ取る。 自分の作品見つめ、制作を振り返る。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> デジタルカメラで作品を撮影し、後日鑑賞会を行う。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> 作品を教卓に集める。



評価

選んだ音（擬音）に合わせて、その音らしい形を発想させることができたか。

…ア行 アスカチ 【発】

形をイメージしながら、意図に応じて紙粘土やへら等の生かし方を考え、創意工夫して表現することができたか。…作品

【創】

自分の作品や友達の作品を鑑賞しながら、そのよさや発想の豊かさを感じ取ることができたか。…授業観察

【鑑】

研究主題（題材）	心を感じる作品（1学年）	領域	表現（工芸）
提案者	三鷹市立第二中学校 大倉 知恵		
研究の視点	・小・中学校の連携（題材の連携を考える）		

題材設定の理由

現在、生活の中で使っている物のほとんどが大量生産である。そのよさもあるが、自分で目的を考えたものをデザインし制作していく中で、物への愛着やその「もの」に関わった人の心を感じ、大切にしていくことにつながると考える。

小中一貫カリキュラムの中で小学校5年「工作にあらわす」(糸のこ)、小学校6年「立体にあらわす」(木を使って)の内容を意識しその発展的な学習として考えた。

指導のねらい

小学校で行った線彫りを発展させ新しい技法（彫り方）を表現しようとする。

浮き彫り・透し彫りの技法を学び、布掛けとして使うことと技法（彫り方）を利用したデザイン（美しく、楽しい）を考える。

作品完成後、作品発表を行いお互いの表現のよさを感じとり、次の作品への参考とする。

計画的に作業を進めていくように計画をする。

学習の展開

	時数	指導内容	指導の留意点
導入	2時間	<ul style="list-style-type: none"> 資料集や参考作品などを見ながら、彫刻の作品を鑑賞する。 彫刻刀の使い方と技法を学び彫刻する。 	<ul style="list-style-type: none"> 全体の計画やねらいの説明をし、彫刻刀の使い方と技法（片切り彫り・葉研彫り・菱合い彫り・かまぼこ彫り）の説明をする。 試し彫り（4種類）を板の裏面を利用し行う。彫刻刀の使い方や彫り方のポイントを助言する。
展開	9時間	<p>【彫刻 やすりかけ 塗装 仕上げニス】</p> <ul style="list-style-type: none"> 浮き彫りや透し彫りを入れながら布掛けのデザインを考え、アイデアスケッチ（彫刻・透かし彫り・布掛けの部分）した図を完成させる。 タオル（布）で、実際の大きさを確認する。 デザインを決定し、活動（板にデザインを写し、彫刻）を行う。 透し彫りの部分、糸のこを順番に使用する。 やすりをかける。 塗装する。塗装後やすりで濃淡をつける。（着色したい場合は、塗装後着色） ニスをぬる。 	<ul style="list-style-type: none"> 布掛けとして使うための機能をもとに楽しさや美しさを考えてデザインするように助言する。 実際にタオル（布）で確認させる。 決定したデザインを実際に作品として彫刻を行い、活動の中でよりよくしていくことを考えるよう、質問しながら制作を行わせる。 彫刻刀の使い方や彫り方のポイントを助言する。 糸のこを順番に使えるよう指示する。 やすりをかけたり、塗装する理由を説明する。
まとめ	1時間	<ul style="list-style-type: none"> 完成した作品について、自分の作品のよさや工夫を中心にの発表を行う。 感想をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の作品のよさや、見ただけでは分からないことを中心に発表させるようにする。 次回への参考となるように、質問等も促していく。

評価

- ・線彫りだけでなく、新しく学んだ技法を使っている。 【関心・意欲・態度】【創造的な技能】
- ・布掛けとしての機能と、デザイン性を考えて制作をしている。 【発想や構想の能力】
- ・活動の中で彫刻刀の使い方やデザインをよりよくするための工夫をしながら制作をしている。 【関心・意欲・態度】【発想構想の能力】
- ・作品を鑑賞し、自分には足りないものを発見しようとしている。 【鑑賞の能力】

研究主題（題材）	絵画（切り絵）：京都・奈良の文化遺産（3学年）	領域	表現・鑑賞
提案者	調布市立神代中学校 加藤 祐志		
研究の視点	・伝統と文化の理解 ・美術文化の継承や創造 ・コミュニケーション能力の育成		

題材設定の理由

美術科の活動は、表現と鑑賞から成り立っているが、これまで表現に重点が置かれてきたことは確かである。昨今、生涯教育の視点などから鑑賞教育の大切さが見直されているが、今回は表現と鑑賞を結びつける指導の試みとして本題材を設定した。


京都・奈良の文化遺産を取り上げたのは、修学旅行と関連付けたからである。直接国宝級の文化財に触れることは、多感な時期の中学生にとって、自国の文化や伝統の理解を深めるまたとない機会である。ここで高めた感性をもとに発想し、構想を練って制作に取り組むことで、表現はより豊かなものになると考え、本題材を設定した。

指導のねらい

古都の印象を白と黒でシャープに表現することで、修学旅行で感じたイメージを説明的ではなく、象徴的に表現させることをねらいとした。また、切り絵の制作過程には、形の整理・簡略化や白と黒のバランス、完成までの見通しを持ちていねいに作業するなど様々な要素が含まれ、表現の基礎的能力を身に付けるにもふさわしい題材と言える。

完成後には切り絵を台紙に貼り、また各自が描いた文化遺産について調べたレポートも台紙に書く。さらに事前に行った篆刻の学習で制作した印も押印することで落款についても学ぶ。こうして様々な要素を一つの作品にまとめるとともに、鑑賞会を行う。このように関連させていくことで、我が国の伝統文化を自分とのつながりの中で捉え、さらに関心や理解を深め、先人の残した文化的遺産の中に優れたものを見いだすきっかけや、それらを継承し発展させようという意識にまでつながることを目的とする。

学習の展開

	学習の内容	指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> 京都・奈良の文化財についてグループでテーマを決め発表する。 切り絵の歴史や制作方法について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 修学旅行で学んだことや感じたことをもとに、よさや美しさを再認識させる。 切り絵の特徴を理解し、完成までの見通しをもって、制作に取り組めるように指導する。
展開	<ul style="list-style-type: none"> 写真集や自分で撮影した写真をもとに鉛筆で下描きを行う。 形を整理し、白と黒のバランスと分量を考え、残すところ(黒くなる箇所)を筆ペンで塗り原画とする。  <ul style="list-style-type: none"> 下絵を台紙に写し、線に沿って白い部分を切り抜く。 切り絵が完成したら台紙に貼り、空いているスペースに作品についてレポートを書く。また印を押す。 	<ul style="list-style-type: none"> 対象を深く見詰め感じ取ったことをもとに発想し、完成作品の構想を練るよう促す。 古都の印象を白と黒でシャープに表現することでイメージを説明的ではなく、象徴的に表現させることをねらいとするので、形の整理、簡略化、白黒のバランスを充分考えさせる。 常に原画を確認し、完成のイメージをもたせる。 細かいところ、小さいところから切らせていく。 表現が硬くならないようにカッターナイフで描くような感じで制作を進めさせる。 カッターナイフの使い方留意させる。 個々の生徒に応じて、切り方や仕上げ方のアドバイスを行い、工夫させる。 制作した文化遺産について、見る人に伝わるようにまとめさせる。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 鑑賞会を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 鑑賞会を通して相互鑑賞と自己評価を行うことで、京都奈良の文化財のよさや美しさを感じ取らせるとともに、自分や友人の作品について、感じたことをまとめさせる。またコミュニケーション能力を養わせる。

評価

（関心・意欲・態度）修学旅行の事前学習で学んだことや実際の見学を通して感じたことをもとに、京都奈良の文化財のよさや美しさを再認識し、制作に取り組もうとすることができる。

（発想や構想の能力）切り絵の特徴を理解し、形の単純化や白黒のバランスを考えて発想し、構想を練ることができる。

（創造的な技能）対象を深く見詰め感じ取ったことをスケッチに表すことができる。カッターナイフの使い方を工夫して、表現するものに合った様々な切り方ができる。

（鑑賞の能力）京都奈良の文化財のよさや美しさが感じ取れる。また、自分や友人の作品について、感じたことをまとめ、発表することができる。

研究主題（題材）	極小の世界（マイワールド）	（1学年）	領域	表現（絵画）・鑑賞
提案者	昭島市立清泉中学校 梶原拓生			
研究の視点	・創造的な構成の工夫（全体と部分のかかわり）			

題材設定の理由

山を描く時、普通、その山に生えている木の一本一本まで、葉の一枚一枚まで描くことは無い。しかし、本題材では、その極小の世界に主眼を置き、あたかも葉の一枚一枚から山を描き出すかのように、部分をひしめき合せて全体を描き出す。完成作品は、生物を顕微鏡で覗いた時の細胞がひしめく世界のように、独特の生命感を湛えたものとなる。

授業の導入においては、16世紀イタリアのアルチンボルドや、江戸時代後期の歌川国芳、現代美術の池田学や、イギリスのトニー・クラッグらの作品を提示する。これらの作家は、それぞれ部分と全体の関わりに特徴があり、部分の細密描写や組み合わせの妙が作品に面白さと迫力を与えている。制作方法としては、16切の画用紙に、ひとつひとつの部分を5ミリ四方ほどの大きさに細密描写して隙間なく埋め尽くし、全体のイメージを作り上げていく。描画にはボールペンを用い、モノクロームで仕上げる。この作品の面白さは、極小の世界を、自分が普段見ている身近なものを組み合わせることで細密し、それが全体へとつながっていくところにある。部分の集積による細密描画作品という焦点に絞り、部分から全体を描き出すという制作過程の面白さ、特異な描き方がもたらす作品自体のユニークさ、隙間なく描画することによって、平面作品としての存在感が生れることを実感させることで絵画表現を広げることが、本題材を設定した理由である。

指導のねらい

- （1）ひとつひとつの部分描写を通して、丁寧に細密する力をつけさせる。
- （2）隙間なく部分を描いていく上で、部分が面白くなるように工夫させる。
- （3）極小の世界に普段見ている身近なものを描かせ、自分の世界（マイワールド）をつくらせる。

学習の展開

過程	主な学習活動	指導・評価の工夫（・＝評価）
導入 1H	○現代美術のトニー・クラッグ、池田学、アルチンボルドや歌川国芳などの作品を鑑賞する。 部分部分を隙間なく埋めて一枚の絵にすることを把握する。	○参考作品の説明をする。制作過程を説明する。 ○あたかも葉の一枚から森を描いていくかのように、身近なものを組み合わせ、細密で描いていくということを説明する。
	○ひとつひとつの部分を、どのような要素で描くかを考え、ワークシートに練習する。	・興味を持って練習することができたか。（関心） ○文房具や部活の道具等、身近な物で考えさせる。
表現 2H	全体の大きな形がだいたい決まった生徒から、画用紙での作品制作に入る。（全体の形は無くても可） 一つ一つの部分を丁寧に描いていく。 部分と部分の間に隙間ができないようにする。 ○部分の並び方が単調にならないように工夫する。 部分の大きさは、基本的に5～1センチ四方以下に限定して描く。	○全体の大きな形は、後から考えても良いことを伝え、部分から描き始めさせる。 部分の形は、異なる形状などを組み合わせると、隙間が埋まりやすいことを指導する。 ・ひとつひとつの部分がきちんと描かれているか。（創造）部分部分を隙間なく描く上で、自分なりの工夫がみられるか。（発想）
鑑賞 1H	○制作過程を振り返り、意図や工夫などを発表する。 ○展示された作品を鑑賞する。	・自分の作品の制作過程を振り返ることができたか。 ・自他の作品の違いや面白さを感じることができたか。（鑑賞）

評価

関心・意欲 ・態度	・作品制作に興味を持って取り組むことができたか。
発想や構想の 能力	・部分を面白い形で全体へつなげられているか。 ・極小の世界に、自分なりの世界を描くことができたか。
創造的な技能	・プロセスを理解し、作品制作を進められたか。 ・部分の細密な形態を表現できたか。
鑑賞の能力	・参考作品の内容を、理解することができたか。 ・自分の作品の制作過程を振り返ることができたか。 ・自他の作品の違いや、面白さを感じることができたか。



参考作品（生徒作品）

研究主題（題材）	造形への入り口 「紙のデッサンと変形」 （1学年）	領域	表現・鑑賞
提案者	東村山市立東村山第二中学校 川瀬悦子		
研究の視点	・小中学校の連携（図画工作から美術へ）		

題材設定の理由

1年美術科4月、教科名が「図画工作」から「美術」へと変わるこのタイミングは造形表現の再活性化という視点から見る時、きわめて重要な意味をもつ大事な時期である。小学校時代の造形遊びを中心とした発散的な活動から、より深く自己を見つめる内省的な活動へと転換していくなかで、改めて美術の楽しさ、面白さに気付かせ、良いスタートがきれるかどうかは、以降の表現活動へも大きく影響を及ぼし、生涯学習への発展にも深く関わってくる。

指導のねらい

- A 素描の基礎技法習得
- B 新しい形の発見
- C さらに新しい形を生み出す。
- D 表現することの喜びを味わう。

準備

教師・・・ザラ紙 画用紙 デッサン用鉛筆



学習の展開

導入 (15分)	(教師の活動) ザラ紙をクシャクシャにして紙の立体（丸めたり、破いたり形に意味はない）をつくる。 出来た物を机の上に置きデッサンすることを伝える。 うまく描こうと思わない、一生懸命に描くことを伝える。 素描基礎技法説明（形 明暗 質感）	(生徒の様子、活動) はやく自分も造りたい。 紙の立体作り 喜び！ おどろき！ 安心。意欲。
展開 (65分)	学習内容 紙の立体をデッサンする。(25分) 素描 A で仕上がったデッサンを見て、何に見えるか？ 考え、想像する。 新しい形の発見 B で見えたものに向けて想像力をはたらかせ、変形する。その際、原型はそのままとし、付け足しや、強調をおこなう。（魚に見えたらひれを加えたり、目を強調したり。画面全体を水の中にしたり。） 作品に題名をつける。 新しい形の創造 C	指導上の留意点 ・ 素描基礎技法指導 机間巡視 このデッサンをもとにさらに発想を広げるのでで頑張るように伝える。 ・ 紙は縦にしても横にしてもよい ・ 消しゴムは使用しない ・ 簡単な見本を黒版に描いて説明する。 ・ 題名を画用紙 表に書き入れる
まとめ (20分)	クラス全員の作品を題名とともに鑑賞する。表現の多様性や豊かさに気づく。 鑑賞 D	・ 良い所を見つけ褒める。

評価

4観点が含まれた教材であるが4月最初におこなうこの教材は 美術への関心意欲を高めることができたか。と、ゆたかな発想力が引き出せたか。の2観点のみの評価とした。

この題材の中には4つの観点が含まれている。 の素描では教室内はことりとせせず集中して紙の造形と向かい合っている。しかしうまく表現出来なかった生徒がいても、その子達は では創造力を働かせ、十分に楽しむ事が出来、新しい形を生み出し表現することができる。

自信を取り戻し豊かな心で、 の友人の作品の豊かさや個性にふれ、自分自身の作品も鑑賞することができる。 の鑑賞の時には教室内は笑いの渦につつまれる。「図画、工作」から「美術」に変わるこのタイミングは今後の制作にも大きく影響する重要な時期である。授業の終わりに「先生来週は何をするの?」「僕 美術大好きになっちゃった」という声がかきこえてくる。

あとがき

人は、美しい風景や造形に接すると、感心して見とれたり、心が穏やかになったり、自然と優しい表情になったりします。それは美しいと感じる心が人の感情に良い影響を与えているからだと考えられます。よい環境の中で子どもを育てたいと誰しもが考えていますが、現実にはなかなか思うような環境の中で子どもを育てていくことは難しいのが現実です。そんな中で、人は少しでもよい環境を作り出す努力をおこなっています。その環境を作り出していくのに必要な力は、美しいものを美しいと感じる心です。その力を育てるために美術科の果たす役割は大きいと考えています。

美術教育が果たす役割のなかには、思考し、判断し、表現する力を育てる。創造性をはぐくむ造形体験の中で、形や色などによるコミュニケーションを通して生活や社会と豊かにかかわる態度を身につけさせる。自分の価値意識を育て、生涯にわたって主体的に創造活動に関わっていく態度をはぐくむということがあります。つまり、美術教育では人が豊かな生活を送るために、自分自身がよい環境を工夫し作り出すことに必要な力と態度を基礎・基本から学んでいるのです。

本研究会では、テーマとして「人間力をはぐくむ美術教育」を掲げ、キーワードとして「かかわり」を重点に研究に取り組みました。「人とのかかわり、モノとのかかわり、場（環境）とのかかわり」について、美術館との連携、小中の連携など実験的な研究授業も含め研究発表を行い、指導助言や講演をいただく中で美術教育が担っている役割とこれからの実践の方向性が示されたと考えております。

今回の研究が、これからの美術教育の中で育つ子どもたちの創造的な能力を高め、感性や情操を豊かにし、日常生活の中に美しさやよさを求める心や行為となって表れてくることを楽しみにしています。人が様々な環境と豊かにコミュニケーションをとり、よい環境の中で自分自身をよりよく成長させていき、自らの価値を向上させ、心豊かな生活環境を作りあげていくための力となってくれることを期待しています。

終わりにになりましたが、東京都教育委員会、立川市、武蔵野市、三鷹市、府中市、昭島市、調布市、小金井市、小平市、東村山市、国分寺市、国立市、狛江市、東大和市、清瀬市、東久留米市、武蔵村山市、西東京市、の各教育委員会、東京都中学校長会、東京都中学校教育研究会、府中市中学校長会、府中市小・中学校図画工作・美術教育研究会には、並々ならぬご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。さらに、会場を提供していただきました府中美術館、府中市立浅間中学校に重ねて御礼申し上げます。

ご助言をいただきました文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 村上尚徳先生はじめ、各分科会の助言者の先生方には、丁寧なご指導をいただきありがとうございました。また、ご講演をいただきました東京藝術大学准教授 布施英利先生には、貴重なご示唆を賜り心より感謝申し上げます。

今回の大会の中で美術が人にとってかけがえのないものであるとの意識を強く訴えた、第26回東京都中学校美術教育研究大会を様々な側面から成功に導いてくださいました全ての皆様に心からの敬意と感謝の意をお伝えして、あとがきとさせていただきます。

大会副実行委員長 大野雅生（西東京市立ひばりが丘中学校）

大会運営組織一覧

大会会長	中野区立中野富士見中学校長	牧井 直文
都中美事務局長	中野区立中野第三中学校	吉田 諭司
大会実行委員長	府中市立府中第五中学校長	中村 一哉
大会副実行委員長	西東京市立ひばりが丘中学校長	大野 雅生
	西東京市立柳沢中学校副校長	矢野 尊久
	武蔵村山市立武蔵野第六中学校副校長	土橋 悟
実行委員会事務局長	府中市立浅間中学校	高橋純一郎
副事務局長	府中市立府中第九中学校	蔵 隆幸
局員	立川市立立川第二中学校	山本 展子
	東久留米市立大門中学校	土田 貢司
	立川市立立川第八中学校	玉川恵理子
	狛江市立狛江第四中学校	安島 典子
	国分寺市立国分寺第四中学校	菅原 賢一
	東久留米市立下里中学校	加藤 順子
実行委員会研究局長	国分寺市立国分寺第一中学校	大澤 晃
副研究局長	小平市立花小金井南中学校	渡辺 和美
局員	国分寺市立国分寺第三中学校	松島 正明
	国分寺市立国分寺第五中学校	北澤 昭俊
	西東京市立田無第三中学校	小林 利夫
	西東京市立保谷中学校	小山田裕子
	東大和市立東大和第三中学校	松村 正博
	東大和市立東大和第二中学校	未至磨明弘
	武蔵村山市立第五中学校	臼田統志夫
	小平市立小平第五中学校	大瀬 義一
	立川市立立川第一中学校	三浦 麻里
	立川市立立川第五中学校	車田 幸道
	府中市立府中第三中学校	遠藤 真木子
	東久留米市立東中学校	藤井 義法
	武蔵野市立武蔵野第四中学校	村上 力
	武蔵村山市立武蔵村山第二中学校	棟方 篤子
	昭島市立拝島中学校	鳥居 浄治
	国立市立国立第三中学校	宇野 庄司
	小金井市立小金井第一中学校	澁谷寿美恵
実行委員会編集局長	清瀬市立清瀬第二中学校	沢井 紀子
副編集局長	西東京市立田無第四中学校	木原 美恵

局員	西東京市立柳沢中学校	菊池美津子
	西東京市立ひばりが丘中学校	河本 彩
	清瀬市立清瀬第三中学校	川原 寛之
	東村山市立東村山第六中学校	相部公太郎
	東久留米市立久留米中学校	廣瀬 正徳
実行委員会庶務局長	府中市立府中第一中学校	木場 隆晃
副庶務局長	小金井市立緑中学校	土肥 尚
局員	武蔵野市立武蔵野第三中学校	三浦 悦子
	狛江市立狛江第一中学校	石黒しおり
	調布市立神代中学校	加藤 祐志
	小金井市立南中学校	本間亜希子
	府中市立府中第四中学校	延本 秀樹
	府中市立府中第四中学校	上路 珠美
	府中市立府中第五中学校	矢田 公男
	府中市立府中第六中学校	中澤 陽子
	府中市立府中第七中学校	入倉 真志
	府中市立府中第八中学校	中川 園子
	府中市立府中第十中学校	竹中 美弥
北多摩地区中学校美術展		
東南中部地区実行委員長	国分寺市立国分寺第四中学校	菅原 賢一
実行委員長	狛江市立狛江第一中学校	石黒しおり
北部地区実行委員長	東久留米市立大門中学校	土田 貢司
実行委員長	清瀬市立清瀬第二中学校	沢井 紀子

都中美大会開催地一覧

回 開催日	開催地 (会場)	大会主題 (大会副主題)
第1回 S58.11.18	品川区 品川総合教育会館	「感動を持って創り出す力を高める美術教育」
第2回 S59.11.20	府中市 府中市立教育センター	「未来を拓く人づくりをめざす美術教育」
第3回 S60.11.27 ~28	豊島区関プロ大会と合同大会 豊島区立千川中学校	「素材と創造者たち」
第4回 S61.10.9	中野区 中野区立第七中学校	「創作意欲をおこさせ表現力をたかめる授業の進め方」
第5回 S62.10.9	立川市 立川市立第九中学校	「崩壊か、低迷か、創造か」
第6回 S63.11.25	新宿区(都図研・都中美合同大会) 新宿区立西戸山中学校・同早稲田小学校	「想像の大地をめざして」 伸びる・ふれあう・美術の根
第7回 H元.10.20	北区 北区立神谷中学校	「やる気見つけた！」 みずからの生き方につながる造形活動をめざして
第8回 H2.11.22	新宿区 神楽坂エミール	「感動が人を創る」 自らをたがやす生徒の育成をめざす美術教育
第9回 H3.10.22	第5ブロック 荒川大会 荒川区立南千住第二中学校	「創るよるこび、生きるよるこび」 今なぜ美術教育か
第10回 H4.10.20	第6ブロック 江戸川大会 江戸川区立小松川第二中学校	「感性が輝くとき」 今、創造の意味を考える
第11回 H5.11.18	第7ブロック 八王子大会 八王子市立浅川中学校	「主体的表現と個性の輝きをもとめて」 心の教育と21世紀へ向けての美術教育
第12回 H6.10.4	本部大会 東京国立近代美術館・神楽坂エミール	「新たな美術教育の展開を求めて」 美術館との連携と鑑賞教育の可能性
第13回 H7.11.14	第8・9・10ブロック 北多摩大会 武蔵野市立第六中学校	「きらめく感性 あふれる創造」 子どもが伸びる授業づくりをめざして
第14回 H8.10.4	第1ブロック 大田区全造連・関プロ大会と合同大会 大田区民センター	「美術と環境 心の軌跡」
第15回 H10.1.22	第2ブロック 世田谷大会 世田谷美術館	「根幹と広がり」 美術を好きになるには 立体表現を通して
第16回 H11.1.28	第3ブロック 練馬大会 練馬区立豊玉第二中学校	「現在、美術は増殖する」 学校から地域へ生涯へ
第17回 H11.11.19	第11ブロック 西多摩大会 西多摩郡日の出町立大久野中学校	「地域から発想」 自然・伝統・生活を見つめて
第18回 H12.11.16	第4ブロック 板橋大会 板橋区立加賀中学校	「美術の時間は発見ワールド」 21世紀の美術は感性を呼び覚ます
第19回 H13.11.22	第5ブロック 足立大会 足立区立第十四中学校・西新井キヤクティ-	「豊かな感性が21世紀を創る」 人権・共生・環境教育の原点としての美術
第20回 H14.11.21	第6ブロック 墨田大会 墨田区立墨田中学校	「美術・生命の泉」 わき出す想像、広がる創造
第21回 H15.11.28	第7ブロック 八王子全造連・関プロ大会と合同大会 八王子長房中学校	「創ることは生きること」 人間・さらなる成長をめざして
第22回 H16.11.5	第1ブロック 品川大会 品川区立富士見台中学校	「観る 鑑る 未来る」 転換期における美術教育
第23回 H17.11.18	第2ブロック 新宿大会 新宿区立落合第二中学校	「創造は生徒を変える」
第24回 H18.11.17	第3ブロック 中野大会 中野区立中野富士見中学校	「みんなの美術」 感動と創造は未来を拓く
第25回 H19.11.8-9	第4ブロック 文京大会 47回関東甲信越静地区造形教育研究大会 東京大会	人間形成としての造形美術教育 新しい教育課程にどう対応するか
第26回 H21.1.16	第8・9・10ブロック北多摩大会(府中大会) 府中市立浅間中学校・府中市美術館	「人間力をはぐくむ美術教育~いま、求められる創造性」 豊かな「かかわり」を生み出す美術の授業



